



法政大学 ソーシャル・イノベーションセンター

Annual Report 2024 vol.2



目次

ご挨拶	2
SIC 運営体制(2024 年度)	3
SIC の概要	4
特集1: 電動トゥクトゥク実証実験	6
特集 2: CAMP in Campus	8
実践する～LAB.～	10
学生 PJ 紹介	10
学生スタッフによる SIC ホームページの開設	29
SIC 教員 PJ	29
SIC 教育プログラム「たまらぼ」	31
交流する～CAFE～	34
参加する～EVENT～	38
触れる～VOLUNTEER～	41
学ぶ～CLASS～	44
年間活動実績一覧	45
各種イベントポスター	49

ご挨拶

法政大学ソーシャル・イノベーションセンター（SIC）は、2023 年度に新設されてから 2 年目を迎えました。本センターは、多摩キャンパスが位置する町田市、八王子市、相模原市などの周辺地域が抱える社会課題に対し、大学として積極的に関わり、共に解決を目指していくことを目的としています。

SIC は、2013 年度に開設された多摩地域交流センター（HUCC）を発展的に改組し、ボランティアセンターの機能を統合することで誕生しました。HUCC としての 10 年間、学生たちは地域の皆様と連携し、団地や商店街の活性化、地域コミュニティの再生、災害対策、伝統文化の継承、耕作放棄地の活用、サーキュラーエコノミーの実践など、さまざまなフィールドで活動してきました。SIC はこうした歩みを引き継ぎ、さらに深く広い連携を目指して進化を続けています。

SIC のビジョンは、「社会課題を解決するための革新的な仕組みをつくり続ける中心的な拠点となること」です。その実現に向けて、以下の 3 つをミッションに掲げています。

1. ソーシャル・イノベーションマインドの醸成と実践を担う人材の育成
2. ソーシャル・イノベーションに関する研究の推進
3. 大学・行政・企業・地域が連携するトライセクター協働の促進

特に多摩キャンパスは文系学部が中心であることから、技術起点ではなく「社会課題起点」のソーシャル・イノベーションを追求している点が特徴です。

2025 年度からは、センターの運営体制も新たな一步を踏み出します。これまでセンター長を務めてまいりました私・糸久 正人（社会学部教授）は任期満了に伴い退任し、新たに野田 岳仁（現代福祉学部准教授）がセンター長に就任いたします。また、副センター長も岡司 直也（現代福祉学部教授）から樋口 明彦（社会学部教授）へとバトンタッチされ、体制を一新して、さらなる高みを目指してまいります。

SIC の活動にご関心をお持ちの皆さま、どうぞお気軽にご相談・ご訪問ください。周辺地域の方々、企業や行政の皆さまとともに、新たな価値を共創できることを楽しみにしております。引き続き、温かいご支援を賜れますよう、心よりお願い申し上げます。

2025 年 3 月



写真左）野田 岳仁（現代福祉学部准教授）
写真右）糸久 正人（社会学部教授）

法政大学ソーシャル・イノベーションセンター長
糸久 正人（社会学部教授）

SIC 運営体制(2024 年度)

(2025 年 3 月時点)

センター長	糸久 正人 (社会学部 教授)
副センター長	図司 直也 (現代福祉学部 教授)
運営委員	中谷 安男 (経済学部 教授)
	島本 美保子 (社会学部 教授)
	樋口 明彦 (社会学部 教授)
	野田 岳仁 (現代福祉学部 准教授)
	高見 京太 (スポーツ健康学部 教授)
連携研究員	千葉 岳志 (日本郵政株式会社 スポーツ&コミュニケーション部部長)
	木暮 美菜 (埼玉大学学術院 (人文社会科学研究科、経済学部) 専任講師)
コーディネーター	本野 直子
	小幡 あゆみ
事務局	多摩事務部多摩事務課学務担当
SIC 学生スタッフ (学年・50 音順)	
2024 年度代表	寺田 光希 (現代福祉学部 2 年生)
大学院	山下 友梨子 (人間社会研究科修士 1 年生)
4 年生	小田 馨太 (社会学部)
	花岡 純光 (現代福祉学部)
	花岡 蒼士 (社会学部)
3 年生	有賀 翼 (現代福祉学部)
	島袋 光弥 (社会学部)
1 年生	川畑 快晴 (経済学部)
	小島 悠莉 (社会学部)
	鈴木 爽真 (経済学部)
	宮本 鼓崇 (経済学部)
	山邊 光毅 (経済学部)
	吉田 遥香 (社会学部)

SIC の概要

法政大学多摩キャンパスは、1984 年の開設以来「地域社会と大学の共生」、「地域に開かれた大学」を標榜し、2013 年 4 月には地域と大学の交流・連携を深め、強めるために、「多摩地域交流センター（HUCC）」を開設しました。同センターではその後 10 年間、都市部や農村・山間部における様々な社会課題の解決にチャレンジし、現在も地域との交流・活動が続けてきました。

そして、2023 年 4 月、多摩地域交流センター開設 10 年の節目を迎え、活動のさらなる発展を目指し「法政大学ソーシャル・イノベーションセンター（SIC）」を開設しました。

多摩キャンパスは、郊外型のベッドタウンが広がる市街地エリアと、古くからの自然・伝統の残る農山村エリアの中間に位置しています。そのため、日常的に様々な特徴を持った環境に触れることができ、全国のあらゆる社会課題を考えるための基礎となる数々の事例に接することができるという強みを持っています。SIC では、この環境を最大限に生かし、様々な社会的課題の解決にチャレンジしています。



SIC の特徴と取り組み

SIC は、多摩地域交流センター（HUCC）の時代の活動から積み重ねられたコミュニティ・ベース、スチューデント・ベースの場であるという特徴を持っています。これまで、その特徴を最大限に生かしながら、市街地・ニュータウン地域、および農村・中山間地域におけるさまざまなフィールドで社会課題の解決にチャレンジしてきました。そのような取り組みの大半が、学生の自主的な志によって生まれ、育ってきたということが、現在の SIC の大きな財産となっています。

その財産を生かしながら、SIC では今後も、以下の 5 つの活動を軸として地域社会の課題解決に向けた取り組みを一層進めてまいります。

01. CLASS

授業・課外プログラム
授業やプログラムを通じ
ソーシャル・イノベーションを

学ぶ

02. LAB.

課外プロジェクト
プロジェクトの企画・実行を通じ
ソーシャル・イノベーションを

実践する

03. CAFE

トークセッション
さまざまな対話を通じ
ソーシャル・イノベーションで

交流する

04. EVENT

イベント
さまざまなイベントを通じ
ソーシャル・イノベーションに

参加する

05. VOLUNTEER

ボランティア
社会のニーズに応え
ソーシャル・イノベーションの
入り口に

触れる

SIC のミッション

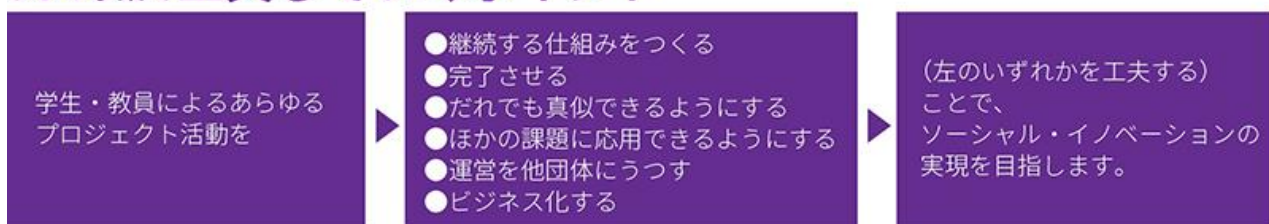
SICは、個人の利益のみならず社会全体の価値の創出を目指して、様々な社会的課題の解決に取り組めます。その解決にあたっては、効率性・持続可能性・効果的・包摂的・公正さといった観点から一層イノベティブな方法を模索し、ソーシャル・イノベーションを推進していきます。その活動は、以下を目的とします。

- ソーシャル・イノベーションを実践しようとする「ソーシャル・イノベーション・マインド」の醸成、ソーシャル・イノベーションを実践する人材の育成・輩出を行うこと
- ソーシャル・イノベーションに関する事業や研究活動の支援を行うこと
- ソーシャル・イノベーションのためのトライセクター（大学・地域・営利および非営利団体）との連携推進を図ること
- 多様なイベントを地域に開いていくことで、多摩キャンパスの活性化を図り、同時にキャンパス内外にさらに豊富な知見・情報・人のネットワークを創出すること

意外と難しくない！ SIC が考える
ソーシャル・イノベーションとは？



SIC の事業で工夫していくポイント



SIC のロゴマークについて



SIC のロゴマークの制作にあたっては、SIC 学生プロジェクトの1つである、ホーセイイノベーションクラブに所属していた栗田雄貴さん（当時、経済学部4年）の協力のもと、SIC を利用する学生を交えた取り組みとして進めてきました。

このロゴマークは、多摩キャンパスが町田市・八王子市・相模原市の3市が接するため、SIC が複数の地域にまたがり活動する様子を、3つの市のシルエットを重ねることで表現しました。また、カラーリングも黄緑・水色（自然）と人（黄色）を重ね、中央には法政カラーであるオレンジ色を採用しています。



特集 1

電動トゥクトゥク 実証実験

2023 年度実施の SIC 教育プログラム「たまらぼ」で最優秀賞を受賞した「電動トゥクトゥク」を使用した通学の利便性向上のビジネスモデル。2024 年度はアイデア実現に向けた第一歩として多摩キャンパスでの実証実験を行いました。

たまらぼ発のアイデア実現に向けて



今回の実証実験は、SIC 教育プログラムの一つである「チェンジメーカーズラボ in 多摩(たまらぼ)」において、2023 年度最優秀賞を獲得した多摩キャンパス所属の学生による提案のプロジェクトです。学生たちは、以前から登下校時のバスの待ち時間等に課題を感じていました。多摩キャンパスの長年の課題とされる「交通アクセス」。路線バスの通学以外の手段として、電動モビリティの導入プランを提案。バス移動の代替手段として提案する電動トゥクトゥクは、学生の移動手段以外に周辺地域への観光・産業にも生かす新たなビジネスモデルとして、審査員からの高い評価を受けました。そのアイデアの実現を目指し、今年度は多摩キャンパスと主要駅の間で実証実験を行いました。実施にあたっては、電動トゥクトゥク「Paco(パコ)」を活用したレンタルサービス『Emobi (えもび)』を展開するスタートアップである株式会社 eMoBi、JR 東日本スタートアップ株式会社と連携し、学生のニーズや実装に向けた課題などについて検証しました。

<サービス概要>

1. 西八王子駅⇨法政大学多摩キャンパス運用期間
2024年5月20日（月）～24日（金）
2. 相原駅⇨法政大学多摩キャンパス運用期間
2024年5月27日（月）～31日（金）
3. 利用料金（全期間共通）
往復（登下校） 一律1,200円
自由走行 1,000円/h

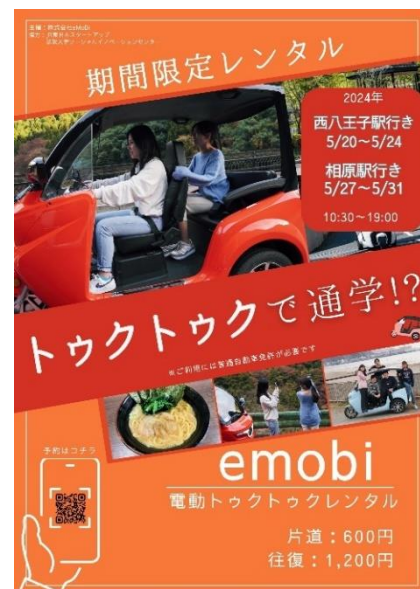
実証実験の成果

(1) 想定利用目標大幅達成、130%の稼働率

10日間2台展開で登下校合わせ1日4回が登下校利用できる想定で始めた結果、実開催期間9日間にて37回の登下校貸出、自由走行希望で10回、累計47回の利用がありました。また、下校のみで5回貸し出す日もあり登校利用より下校利用の方が利用ニーズが高いという傾向が確認されました。これは下記の通り下校時は地域の飲食店や施設を利用しながら下校したいというニーズがあったためと考えられます。また平均の利用時間は1時間でした。

実証実験期間中の電動トゥクトゥク利用実績

	目標値	実績
総貸出回数	24回（片道）	37回（片道）
		10回（自由走行）
稼働率	60%	130%
総売上	-	¥31,700
顧客満足度	90%	97%



(2) 学生に対して複数人で体験する周遊手段を提供することの有益性

車載GPSデータより、学生は1日平均半径8km圏内で移動、周遊していたことが分かりました。具体的には友人同士で飲食店や施設に立ち寄り、友人を離れた沿線の駅まで送迎するという活用事例が確認されました。また利用者アンケートにてEmobiで行動範囲が変わったと感じるか調査した所、81%が広がったと思うと回答しました。このことから学生が複数人で自由走行できる手段を提供していくことは一定のニーズがあると推察しています。

また、地域の周遊と飲食店や施設の利用は地域経済にとっても有益であると考えており、近隣地域に対しても一定の成果があったと考えています。

(3) 今後の展望

今回の実証実験では、新たな移動手段の学生ニーズ、周遊性を分析対象としました。今後は更なる地域連携を図ることでより学生が利用しやすいシーンを増やす事や、車両アップデートによる利便性の向上、学生以外も対象とした地域周遊に繋がる施策展開を予定しています。

（2024年6月報告より）



特集 2

CAMP in Campus

CAMP in Campus は現代福祉学部・水野雅男研究室が主催する避難生活の代替案として大学のキャンパス内で野営を行うことを提案し、実際に大学内でテントを張ってキャンプを行う実証実験の取り組みです。

背景

日本における被災地での避難所生活は、小中学校の体育館に雑魚寝というものが多く、スフィア基準※に照らし合わせて、難民キャンプよりも劣ると言われています。乳幼児を抱えた家族やペットと生活を共にしている家族など、集団生活に馴染まない方が多くおり、さらに、避難所で配給される食事、パンやインスタント食品などが毎日続く状況にあります。（※被災者が尊厳ある生活を営むための人道支援活動における国際的な最低基準）



一方、海外では地震国イタリアのように、発災直後にテントとトイレ、キッチンカーが被災地に届き、家族ごとに温かい食事を作りながら避難生活を送るという事例があり、一つの参考となります。

CAMP in Campus は「人間らしい」避難生活を送る環境を作り出すことを目標とし、法政大学多摩キャンパス内の芝生広場（ひだまり広場）を会場として、年に4回、シーズンごとに実施しています。実際にキャンプを経験することで、被災して家に戻れない場合のシミュレーションを行うことにもつながります。本取り組みを通じて、屋外避難という選択肢を増やし、プライバシーが守られた状態で楽しみながら過ごすことのできる避難生活を提案していきます。

CAMP in Campus の活動趣旨と教育目的

【活動趣旨】

1. 人間の尊厳「豊かな生活」、社会的包摂「多様性」という観点で避難生活の改善策を検討
2. 避難生活の安全性、快適性の向上を目指し大学キャンパスの資源の可能性を検討する

【教育目的】

1. 他学部学生らとの毎日のグループワークを通じて、協働作業の素晴らしさを体験する
2. まちづくり活動に必要となる「コーディネート能力」「デザイン力」の大切さに気付く
3. 自分達のフィールドワークを記録し報告することで「プレゼンテーション能力」を身につける
4. 最終的に政策提言や事業計画まで取り組むことで、まちづくり分野の楽しさを知る

ボランティアキャンプ・フィールドワーク@ボランティアキャンプすず

「ボランティアキャンプすず」は能登半島地震で大きな被害が出た石川県珠洲市の鉢ヶ崎オートキャンプ場に設置されたボランティア滞在のためのテント村です。水野雅男教授が中心となり、能登半島地震のボランティアに訪れる人々の活動拠点として整備されました。「ボランティアキャンプすず」の開設にあたっては、SIC や（一社）SAVE IWATE など運営協議会を設立、珠洲市所有地を借用し（株）モンベルやSoftbankなどが協力して環境を整えました。

2024 年 8 月の夏休み期間中には、法政大学の学生もボランティアマネジメント実習として、珠洲市でのボランティア活動やボラキャンすずの運営に携わりながら、被災地の現状について調査研究を行いました。能登半島地震被災地の珠洲市におけるボランティア活動と被災地の実態調査を行うフィールドワーク参加者（羽田空港からの交通費支給）を募集し、25 名の学生（法政大学 22 名、他大学 3 名）が参加しました。

フィールドワークに参加した学生は、各々1週間滞在し、ボランティア活動に取り組む一方で、個々が関心を寄せることを調査するために、インタビューや現地踏査等のフィールドワークを実施しました。その項目は、避難所運営、障害者避難、農林水産業の被災状況、復興まちづくりへの地域住民の声など多岐にわたりました。



自由を生き抜く実践知大賞 大賞受賞

このボランティアキャンプ・フィールドワークの取り組みが認められ、2024 年度（第 8 回）「自由を生き抜く実践知大賞」の大賞を受賞しました。SIC では引き続き本活動をサポートしていきます。





実践する ～LAB.～

キャンパス周辺地域をはじめとした地域社会の課題解決やイノベーションの実践に取り組む研究やゼミ、サークル、個人活動を SIC に登録すると、様々な支援を受けることができます。特に、学生主体のプロジェクトには助成金制度もあり、多種多様な課題への取り組みをサポートします。

【2024年度に登録された SIC 学生プロジェクト】



館ヶ丘プロジェクト

活動地域：館ヶ丘団地（八王子市）
社会課題：団地住民の社会的孤立
多世代交流の一過性の解消
活動の目的

高齢化している団地住民の生活支援や社会的孤立、学生と団地住民の多世代交流の一過性の解消を目的としている。そして、学生が団地に入り込むことにより、学生の持つ若さ・元気で起きる団地住民との化学反応で地域活性化に寄与していくことや団地で行われる春祭りや秋祭りに参加することで、関係人口の増加につなげていく。また、学生が個人活動や定期的に行う学生カフェなどのイベントを通して、継続的に団地に入り込むことによりコミュニティの偏在の解消、新たなコミュニティを形成していく。

今年度の活動

- 3月 学生カフェ、個人活動
- 4月 学生カフェ、個人活動
- 5月 春祭り、個人活動
- 6月 学生カフェ、映画交流会、個人活動
- 7月 学生カフェ、個人活動
- 8月 学生カフェ、個人活動
- 9月 防災フェスティバル主催、個人活動
- 10月 学生カフェ、個人活動
- 11月 秋祭り、個人活動
- 12月 学生カフェ、個人活動
- 1月 個人活動
- 2月 学生カフェ、餅つき大会、個人活動

活動により見込める効果

館ヶ丘団地は高低差のある団地のため、移動困難な高齢者が多く、また、単身世帯の高齢者が多いため社会的に孤立している方が多く存在している。そのため、団地タクシーやスマホ相談などの活動によって団地住民の生活の向上、そして学生カフェの開催や団地のお祭りに参加し、新たなコミュニティの形成や団地内外の人を呼び込むことで関係人口の増加につなげることが見込まれる。

学生が継続的に団地に訪れることで、団地に若い人がいないといったイメージを払拭し、活動的という印象を与えることができる。また、高齢者の若者に対する印象の変化や団地住民との関係性が深まることで、住民の生活水準をよりよくしていくことが期待できる。

活動で得られた成果

今年度は、多世代交流の一過性と関係人口の増加を課題として活動してきた。学生カフェなどのイベントや個人活動を継続的に行うことで、多世代交流の一過性を解消することができた。

また、秋祭りでは、日ごろの個人活動や学生カフェなどのイベント、広報活動により、去年の参加人数を100人上回った。団地内外からの来場者が増えることで、関係人口の増加や団地の活性化につなげることができた。

今年度から団地の商店街の活気を取り戻すことや若者のコミュニティづくりを目的として新たな活動に挑戦しており、URや自治会など対話の機会を持ち協力していただいている。



今後の課題点

館ヶ丘プロジェクトでは、団地内のコミュニティの偏在、社会的孤立の解消のため、継続性を持って活動してきた。しかし、それが学生の負担となり、個人活動やイベントに取り組むメンバーが一部になっていることが課題として挙げられる。

今後は、ボランティアに対する堅いイメージを払拭し、団地住民の方に楽しんでいただくだけでなく、自分たちも楽しめる場所を作っていくことで課題解決につなげていきたい。

@団地 寺田団地活性化プロジェクト



活動地域：UR都市機構グリーンヒル寺田団地

社会課題：つながりの希薄化と地域衰退

活動の目的

2014年から寺田地域への参画開始を皮切りに、2016年3月、八王子市－UR都市機構－法政大学の三者で「グリーンヒル寺田団地における連携・協力に関する協定」を結び、当年11月にはついにグリーンヒルおひさま広場がオープンした。それからおよそ10年かけて作り上げ、コロナ化を経てもなお存続してきたこのコミュニティスペースを発展させ、この先も継続してより一層幅広い「**つながり**」の強化を図ると同時に、残り1つとなった空きテナントを新たなコミュニティスペースとして発足させる動きの高まりを助けることで、**寺田地域の活性化を加速**させたい。

加えてネット社会やコロナ禍の影響により希薄化する**人々の直接的な交流**がより活発になる環境を作り出すことを狙う。

活動により見込める効果

個性の光るコミュニティが自由に活動している地域の特性に対し、金銭的な利害関係をもたない**学生という属性を活かして**、各コミュニティとの連携ハードルを下げることで本来の意味の「**つながり**」を生み出せるのではないかと考える。また、@団地がそのコミュニティ同士を渡す懸け橋の役割を果たし、それぞれの個性を尊重しつつ、ゆるやかでありながら広がりのある、かつ安定した**寺田地域のつながり(一体感)**を生み出したい。

加えて学生自身も多世代との交流を通して普段触れられない価値観や体験から大きな経験と学びを得て成長することができるだろう。

当団体の活動を地域住民の方々と学生の両者に認識してもらい、今後も学生が**寺田地域に持続的な関わりを保つための効果**を期待する。



今年度の活動

【定期開催】

・お楽しみDAY

子どもたちに普段できないような体験を。ランタン作りや化学実験、利きチョコなどを企画

・スマホお悩み相談会

スマホに関する基礎的な悩みに1対1で丁寧に柔軟に対応、たわいなしなお話も。

【その他の活動】

・Step Outてらだ だんちdeチェアリング

イベントに学生ボランティアとして参加
10月に1つの企画団体として参加

・梶田子ども食堂

配膳補助や子どもたちとの交流

・寺田活性化の会 イベント補助等

こいのぼり・七夕・イルミネーション装飾等

・グリーンヒル寺田自治会 イベント運営補助

クリスマス会内容企画、進行

・寺田学童保育所 イベント補助等

多摩祭、ボウリング大会、学童祭りなど

・グリーンヒル寺田幼稚園 交流イベント

11月に学食、円芝で交流

活動で得られた成果

@団地の活動において、活動の充実や新たな取り組みを通じて地域との**つながり**を生み出すのみならず、団体の認知度向上や地域住民の活動意欲の向上にも貢献できたと考える。例として「Step Outてらだ だんちdeチェアリング」というUR都市機構・URリンケージ主催の比較的規模の大きいイベントでは学生ボランティアとしての参加に加えて10月には世代を超えた交流を促す企画の運営を行い**多世代交流の懸け橋**として、その一助となることができた。普段の活動で個別につながりがあるスーパー「J-Smile」や「おひさまcafé」、そして地域の方々との**おひさま広場全体としてのつながり**形成を実感できる機会であった。

また持続可能な仕組みづくりにも注力し、参加学生の安定化を図ることで運営の負担を分散しながら**継続的な活動**を可能にした。今後も地域と連携しより多くの人に関われる場を築いていきたい。

今後の課題点

告知について、現在は全体の活動情報をXで流しながらチラシ配布での告知を行う形をとっているがチラシ配布への参加学生が固定化してしまった。レターパックやInstagramの活用などを現在模索中である。

またお楽しみDAYにおいて子どもの参加人数のばらつきが課題として挙げられる。多くの子ども達に企画を楽しんでもらうため、告知範囲の拡大や年齢関係なく交流できる場の提供を目指したい。

秋チャレ

地域にスポーツの楽しさを広めよう！



活動地域：相模原市

社会課題：運動習慣の低下

活動の目的

- ・法政大学体育会サッカー部と地域社会（団地や小学校）のスポーツを通じた関わりを持つ。
- ・弊部の認知向上とともに、地域の方の運動習慣の形成と新たなコミュニティ創出に寄与

活動により見込める効果

- ・法政大学体育会サッカー部の認知拡大
- ・地域の方の運動習慣の形成
- ・新たなコミュニティ創出

今年度の活動

10/26

グリーンヒル寺田にて
サッカー教室の開催

2/28

相模原市立広田小学校にて
サッカー教室の開催

活動で得られた成果

- ・法政大学体育会サッカー部の認知拡大
- ・近隣団地との関係性構築
- ・地元企業との関係性構築
- ・法政大学体育会サッカー部の選手による地域貢献



今後の課題点

イベントの数が少なく地域団体との継続的關係が作れなかった

来年度からは行政とも連携し、イベント数を増やす予定

法政馬広場



活動地域：多摩キャンパス周辺地域、
代々木ポニー公園

社会課題：子どもたちへの馬と触れ合う機会の提供
人馬双方のウェルビーイングの向上

活動の目的

法政馬広場は、地域の子どもたちと馬とのふれあい企画を実施し、子どもに新鮮な学びを提供したり、豊かな情緒の形成を支援したりすることを目的に発足した。併せて、活動を通じて人と馬がどちらもウェルビーイングを向上させられることをプロジェクトの理念としている。

当プロジェクトでは、「言葉のいらないふれあい」をキャッチコピーに、来年度から地域の子どもたちを対象とした定期的な馬とのふれあい企画を開催することを目指している。この企画では子どもたちに新鮮な体験を与えるだけでなく、経験を培い人間関係を豊かにするなど子どもたちの精神的な成長に関与することを目指している。

活動により見込める効果

法政馬広場での活動では、子どもたち、地域社会、馬を取り巻く環境にポジティブな影響を与えることができると考えられる。

まず、子どもたちは普段経験することの少ない馬との触れ合いを通じて新たな興味・関心を育むことができる。また、地域の小学校や学童の子どもたちを大学に招いてイベントなどを行うことで、大学と地域社会とのつながりを高めることが期待できる。そして、既存の乗馬クラブなどの枠組みにとらわれない活動を展開することで、馬が活躍する場がさらに広がることが見込まれる。

当プロジェクトは同じく地域交流活動に取り組んできた**体育会馬術部**とも連携することで、より豊かな体験活動を提供できるよう取り組んでいる。また、今年度発足した「**人馬のウェルビーイング研究所**」との連携を深め、活動やその評価に学術的な視点を取り入れていくことを目指している。



今年度の活動

【**組織作り**】新年度にプロジェクトを立ち上げ、SICでの新歓などを通じてメンバー集めやチームでの関係性作りを行う。

【**全体研修**】8月末に渋谷区にある代々木ポニー公園とJRAの馬事公苑を見学し、ホースセラピーに取り組む事例などを学習した。

【**マレーシアでの研修**】8月末、メンバー3人がマレーシアで行われている障害者乗馬の活動を見学、体験させていただく。

【**多摩祭への参加**】10月に行われた多摩祭にて、馬術部と共同でポニーのふれあい企画に参加した。当プロジェクトとして初めてのイベントとなり、馬を使った企画に必要な環境や技術を学ぶことができた。

【**ポニー公園での研修**】12月から、メンバーが2、3人ごとにポニー公園で研修を行っている。一人ひとりが企画で求められる実践的な技術を学び、当日の馬や子どもとの関わり方を具体的にイメージすることができている。研修終了後には日誌を記入することで学んだ内容を共有しており、今後の新入生への研修にも活用したいと考えている。

【**SICの他プロジェクトと共同で地域の子どもたちとの企画を実施予定**】3月26日に若葉台プロジェクトと連携し相原市広陵小学校の学童クラブと、3月27日にゆうやけプロジェクトと連携し町田市ゆくのき学園の学童とそれぞれ馬とのふれあい企画を予定している。企画へ向けた準備を進めており、12月にゆくのき学園の学童を訪問し企画内容を話し合った際は、子どもたちを対象にした活動を安全に実施するために、学校関係者からの視点を企画に反映させることができた。

活動で得られた成果

今年度はプロジェクトの立ち上げや連携先との関係作りを行い、活動の基盤を整えることができた。特に、馬術部や「人馬のウェルビーイング研究所」など大学内の他団体とも連携を行うことで、より有機的、持続的な活動を展開できるのではないかと考えている。

10月の多摩祭でのイベントをはじめ一年を通じて行われた研修や関連した活動への参加などから、具体的な知識や技術だけでなく、当プロジェクトのモデルとなる活動を多く学び、今後企画を実現していくにあたって求められる役割や心構えについて理解を深めることができた。

今後の課題点

プロジェクトの目標である子どもと馬との定期的なふれあい企画の開催に向けて、知識や技術の習得をさらに行う必要がある。

本格的な活動の際は馬の輸送費やメンバーの交通費などが高額になるおそれがあり、外部資金の獲得も視野に様々な選択肢を検討していきたい。また、体育会馬術部や「人馬のウェルビーイング研究所」との連携方法を明確にし、それぞれの強みを最大限活かした企画作りを行っていきたい。

わくわくほうせい！

活動地域：多摩地域

社会課題：理系離れ エネルギー問題

活動の目的

演示実験や地域の子ども自身に実験してもらう体験型実験を通して子どもたちに科学の面白さを理解してもらい、同時に大人には理系教育への関心や知識を得ることで理系離れの解消に取り組んでいます。また、理科を用いてエネルギーを生み出し実際にそれを利用することを地域の人々に体験してもらうことで理科に関わりながら活動することを目的としています。そして理科を地域の人々に体験させるだけでなく、社会問題にも携われる活動も行っています。事例として、高齢者の日々の生活に必要な移動を楽しみ、行動範囲を増やすために新たな移動手段として電動モビリティ制作（太陽光で走ることが目標）などを行っています。

活動により見込める効果

子どもたちに理科を用いた実験を行うことにより、印象に残る体験を与えることができ、それにより理系離れに歯止めがかけられることができると見込んでいます。幼い時期に印象に残った理科への面白さや不思議な体験が成長した時に理科を学ぶきっかけになると考えています。また、同時に子どもの保護者にも体験してもらうことで親が子どもの理系選択を応援しやすくなるようになると考えています。保護者にはエネルギー問題や生活に必要な移動手段などの社会問題を用いたアプローチを行うこともできます。特に移動手段に関しては高齢者が気軽に乗ることができるようになれば、より科学の良さを幅広い層に広めることができ、様々な効果をより見込めると考えられます。



今年度の活動

6月には、福生市で行われた環境フェスティバルにおいて、ステージ企画に参加し、家庭でも簡単に買える材料のみを用いて実験を行い、科学の面白さを披露する科学実験ショーを行いました。そして10月には、キャンパス近隣にある保育園の園児を大学の実験室に招待し、割れないシャボン玉など幼い子どもでも分かる身近で不可思議な現象を起こせる科学実験を披露しました。また、11月にはめじろ台団地にて、ソーラーパネルによる発電を電源としたホットプレートを使いホットケーキの作るイベントをしたり、リチウムイオン電池を用いたモビリティの展示を行い、将来的にソーラーパネルと併用することでエネルギー問題にも対応しながら地域の方々の移動手段になりえる可能性と、科学のもつ力を子どもから高齢者まで多くの地域の人々に伝えました。

活動で得られた成果

活動の成果として一番大きなものは、地域交流を通して様々な方が、科学の力や面白さを体験し、感じる事が出来る機会を設けたことだと考えます。科学と聞くとどこか堅苦しく、難しいことであるように感じる方も多いと聞きます。そのため、理系離れの解消のためには、科学の技術を楽しむ、刺激的に体験をすることができる機会が重要であると考えます。また、地域の方々のみならず、私たち学生も、科学の面白さを再認識することができるとともに、安全な実験の方法や薬品の扱い方を学ぶことが出来ました。同時に、地域の施設や機関と連携し、一つのイベントを作り上げる経験をする事が出来たことも、活動の成果であると考えます。

今後の課題点

今年度の課題点として、実験の手順や仕事の割り振りが上手くいかなかった部分があることです。今年度は、新型コロナウイルスの流行により中断されていた様々な企画が再開されたため、学生にとって不慣れな部分があったことが原因だと考えられます。今後は今年度の活動を見直し、より余裕のある計画を立てるとともに、実験のバリエーションを増やし、より様々なイベントを通じて、科学の面白さを伝えていきたいと考えます。

市民DX

活動地域：八王子市、町田市

社会課題：地域社会のDX推進

活動の目的

情報化社会の進展により地域社会における情報化がますます重要な位置を占めている。デジタル技術を利用した機能やサービスを利用できない人々とできる人々との間に格差が生まれている。これは、デジタル技術の利活用能力の差による社会の分断を招く危険性を含む重大な社会問題であるため、早急に解決する必要がある。また、現代社会はVUCAと呼ばれる変動性、不確実性、複雑性、曖昧性の高い状況に直面している。このような時代において、地域社会がデジタル化に適応し、個々の市民が技術を習得することは、社会全体の安定と発展に不可欠である。

そこで本活動では、市民がデジタル技術を獲得し、それぞれが抱えている課題を解決するための手段を与えることを目的とする。

活動により見込める効果

現代社会には様々なデジタルトランスフォーメーションの段階に適応した市民が存在する一方で、デジタル技術に慣れていない層が第一段階でつまずくことも多い。そのような現状を踏まえ、こうした第一段階でつまずいている人々を支援する取り組みの重要性を明らかにするとともに、情報格差を解消し、社会がデジタル技術をベースにして動きやすくなることで、社会全体のDX推進が見込まれる。

10月20日ワークショップ実施時



今年度の活動

ワークショップの実施

2024年10月20日、法政大学多摩祭の教室企画の一環として架空の飲食店のモバイルオーダーアプリをモデルにUIに関する問題点を発見、解決してもらうというワークショップを行った。

使用ツールとしてMarvelと呼ばれる視覚的にアイデアを具現化できるデザインプロトタイピングツールを用いた。このツールを使用してプロジェクトメンバーが事前に問題点のあるUIデザインのアプリを事前に制作した。

ワークショップでは、まず体験者にMarvelのアプリ表示機能を利用してハンバーガーセットを注文する指示を与え、その流れの中で問題を発見させた。次に実際にMarvel上で編集させてその問題を解決させた。

アンケートの実施

ワークショップ終了にアンケートを実施。ワークショップの感想や、ワークショップを通じた意識の変化を調査した。

活動で得られた成果

アンケートの結果より、9割の方が「ちょうどいい」「簡単」と回答したことが分かった。つまり、自分の力で課題を発見しデジタルで解決するという目的を達成することができたと考えられる。

また、ワークショップの難易度において、「簡単」と回答した方の約8割が「Marvelを用いて自作Webサイト等を制作してみたい」と答えた。しかし、「ちょうどよい」もしくは「難しい」と感じた方に限ると約5割に留まる。このことから、難しく感じてしまうと、再度触れようとする意欲が薄れてしまっていることが分かった。

今後の課題点

参加してもらった人達にはある程度の高評価を得られたが、まだまだ参加者が多いとは言えない。体験のしやすさを維持しつつ、いかに多くの人に参加したいと思ってくれるかを考えたい。また市民DXという日常では聞き馴染みのない言葉に親しみを持たせられる工夫をしたい。今後、ワークショップの内容をより理解しやすく改善し、いかに平易にみせるか、体験してもらうかが鍵といえる。

ゆうやけプロジェクト

活動地域：相原町、長房地域

社会課題：放課後支援の場で大学生が小学生の遊び相手になり、子どもを中心に相原地域の人々に交流を増やしたり地域に賑わいをもたらすこと

活動の目的

子どもたちと大学生とで地域交流すること。子どもたちと大学生が交流すること。ユニバーサルな、子ども達の知らない世界に実際に触れてもらうような活動をして、子ども達の経験を多様なものにすること。様々な年代の人と子どもたちとの関わりを繋げること。子どもたちの将来に向けて、ゆくとも（子どもとの交流）やりびんぐを通していろいろな学ぶことで子供達に経験を積んでもらうこと。

活動によって見込める効果

共にご飯を作ったり、工作をすることで子ども達の自立心を促す。また、地域スタッフなど多様な年代の人と協力することを学んでもらう。また、大学生との交流で、人と関わる楽しさを知ってもらう。大学生は、子ども達との関わり方を学べる。教育系、子どもと関わる分野で働くにあたって、何が子どもにとってよいのか、学びにつながるのか実践を通して考えることができる。



今年度の活動

りびんぐ

- ・ 6月30日 流しそうめん
- ・ 7月27日 スマホ講座
- ・ 9月28日 お茶の世界を楽しもう企画
- ・ 12月22日 スノードーム作り

しゅわしゅわパーティー

- ・ 5月12日
- ・ 8月11日
- ・ 11月17日
- ・ 2月9日

活動で得られた成果

イベントの中で大学生と子ども達が会話する機会が増えたことで、これまであまり話さなかった子どもの口数が増え、他の子どもと話している様子を見ることが増えた。

また、規則を守ろうとする光景もよく見られるようになった。普段のゆくともにおいてルールを設定し、お互いが喚起し合う光景を見ることが増えたと感じた。

今後の課題点

子ども達に、安全に楽しくボランティア活動をしてもらうにあたって、3つルールを考えるのだが、その内容を詰めること。地域の少子化で、イベントに参加する子どもが少なくなっている。大学生も活動に積極的なメンバーが少ない。りびんぐというイベントに対するニーズを考え直したい。



HTLプロジェクト

活動地域：町田、キャンパス、新宿

社会課題：貧困、食品ロス

活動の目的

食品ロス問題と生活困窮者支援を同時に解決できる仕組みづくり。

具体的にはコンビニや飲食店の販売期限切れの廃棄商品（消費期限が近い食品）を路上生活者などの生活困窮者に配布したいと考えている。

ボランティア活動の参加や情報収集によって、貧困という大きな社会問題についてメンバー各々が知識を得ることで、より深く自分の考えを持てるようになるのではないかと考える。それを通して、自分たちにできる、また自分たちだからこそできる支援の方法を探っていきたい。

学生の貧困問題に目を向け、学生だからこそできる学生への手助けを提案したい。

今年度の活動

7月

メンバー集め、説明会の実施

8月

新宿スープの会に参加

スープの会では新宿でホームレスにスープを配りながら困りごとなどを聞いて回った。現在も参加継続。

9月

つくろい東京ファンドへお話を聞きに行った。

生活困窮者支援について学んだ。

10月

フードドライブの準備。アンケートの作成。

11月

キャンパス内でフードドライブ実施（Ethicalと合同）。こども食堂せかいさんに寄付。

12月

キャンパス内で開催されたクリスマスマーケットにてフードドライブ実施。

活動により見込める効果

食品ロス問題へアプローチ

→運搬焼却時のCO2削減、埋め立て時のメタンガス削減、生産流通時のコスト削減

貧困問題へのアプローチ

→生活困窮者の生活支援、



活動で得られた成果

フードドライブではアンケートを取り学生生活の傾向をつかむことができた。

ホームレスに対するイメージ改革。フードドライブでは目に見える形で成果が見れた。

スープの会への参加ではメンバー各々、路上生活者に対するイメージが変わった。また路上生活者から「大学生が来てくれると楽しい」、「忙しいのに来てくれてありがとうね」などの声をいただき、大学生である自分たちだからこそできる支援を見出すことができた。



今後の課題点

欠席が多い。

→一人ひとりがやりがいを持てる工夫。

スケジュールの共有ができていない。

→リマインドをしっかりとる。

係の分散ができていない。

プロジェクトとしては、外部とのつながりを持ち、新しい活動をしたい。

助成金を有効活用できなかった。

藤野やまなみプロジェクト

活動地域：相模原市緑区牧野

社会課題：森林や里山の荒廃

活動の目的

藤野やまなみプロジェクトは、やまなみ公園を拠点に、地域の憩いの場としてのコミュニティガーデンを創出し、豊かな自然を保全することを目的として活動している。

この活動は、私たち「たまぼら藤野やまなみプロジェクト」と、地元の「牧野元気創生会」が協力して実施しており、地元住民と学生が連携して公園の美化に取り組んでいる。

また、やまなみ公園の整備を通じて、地域の方々に愛されるコミュニティガーデンの創出を目指し定期的に活動を行っている。

活動により見込める効果

本プロジェクトの活動によって見込まれる効果は主に三つある。

一つ目は、自然環境の改善である。芝桜の植樹などの整備活動により、自然公園が美しく保たれる。また、定期的に活動を行うことで参加者の環境保全に対する意識を高め、持続可能な取組みにも繋がる。二つ目は、地域コミュニティの活性化である。学生と地元住民が協力して活動をするすることで、世代を超えた繋がりが生まれる。

また、住民自ら手入れをすることで、公園への愛着が増し、地域の結束力が強まることにもつながっていると考える。



今年度の活動

今年度は、自然環境の保全の他に、学内外への活動の発信を視野に以下の活動を行った。

- 4月～5月 芝桜の植樹、新歓
- 6月 公園の整備、講演会の準備
- 7月 講演会
- 8月 彼岸花の球根を植える
- 9月～10月 公園の整備
- 11月 枯木の伐採
- 12月～2月 広報誌（リーフレット）の作成

以上の活動を地元の創生会と協働し、やまなみ公園や峰山の登山道などの自然公園の整備活動を行った。これらの活動を通じて、地域住民との交流を深め、自然環境の保全と地域の魅力向上に努めている。また、この取り組みを発信するために本プロジェクト主催の講演会や、広報誌の作成などを行った。

活動で得られた成果

この活動により、以下の成果が得られている。まず、公園の環境が整ったことが挙げられる。今年度活動を始めた当初は台風の影響により自然が荒らされた状態だったが、整備活動を行ったことにより環境が美化され、魅力が高まった。

また、地域コミュニティの活性化も挙げられる。地元の団体と学生が協力し、やまなみ公園の整備を行うことで、その交流が深まった。また、活動内容や講演についてまとめた広報誌を発行し、学内外への情報共有とコミュニティの結束強化に寄与している。

さらに、相模原市の「令和6年度地域活動・市民活動ボランティア認定制度」において、認定を受け、活動が地域社会から高く評価されている。

これらの成果を通じて、本プロジェクトは地域社会の活性化と自然環境の保全に大きく貢献している。

今後の課題点

本プロジェクトでは、地域活性化と自然環境の保全に取り組んでいるが、今後の課題として以下の点が挙げられる。

その一つとして、人口減少と高齢化の課題がある。藤野地区では人口減少と高齢化が進行しており、地域活動の担い手不足が進行している。また、情報の発信力も不足している。現在はSNSでの発信があまりできておらず、特に若年層へのアプローチが問題である。

佐野川プロジェクト

活動地域：神奈川県相模原市緑区佐野川地域
東京都町田市大戸地域

社会課題：過疎化・高齢化による
耕作放棄地の改善、景観保全

活動の目的

佐野川地域は、2009年に朝日新聞社によって、「**ほんの里 100選**」に選出されているほど、風光明媚な地域である。しかし、**過疎化・高齢化の影響**によって農業従事者の人口が減っており、耕作放棄地が拡大している。我々の目的は、佐野川地域の耕作放棄地を改善し、将来にわたり耕作放棄地を生まないための持続可能なシステムを構築することである。

活動により見込める効果

佐野川地域の課題として、高齢化・過疎化が原因とする**耕作放棄地の増加**が挙げられる。耕作放棄地の改善にかかる費用を農作物の販売によって賄い**金銭的に自立したシステムを確立**させる。また、佐野川地域の魅力がより多様な属性を持った人たちに向けて効果的に伝わるようなイベントを企画・実行することで**関係人口を増やして**いくことも目標である。



今年度の活動

3月	城山e-bike 販売 山崎団地 販売 百草団地 販売 茶畑整備	10月	茶畑整備 多摩祭 出店 西八王子ハロイベ 藤野ふるさと祭り
4月	大地の再生講座 茶畑整備	11月	茶畑整備 大戸整備 まちカフェ！
5月	茶畑整備 お茶収穫	12月	まちのスコーレ エシカルモーニング 大戸整備 実践知大賞
6月	大戸竹刈り 大戸整備		
8月	茶畑整備		
9月	茶畑整備 2回 大戸整備 ゆうやけ合同イベ		

活動で得られた成果

- ・ お茶120kg（235袋）収穫
- ・ 新たな活動地域の増加、知名度の向上
- ・ 他PJとのコラボ企画の増加
- ・ 大戸芋収穫量増加
- ・ 町田法友会からの資金的援助獲得
- ・ 実践知大賞

「持続可能な社会への貢献賞」 受賞

今後の課題点

佐野川の地域の方との交流活動が少ないことが課題。そこで地域の中で浮き立った活動にならないために地域の人を巻き込んだ活動を行うことが必要だと考える。佐野川茶という地域資源を通じて自然と地域の人が繋がれる場となることで、自然発生的なコミュニティを形成していきたい。

しろやまふれんず

活動地域：相模原市城山地域

**社会課題：多世代交流の機会減少
地域と若者の交流の減少**

〈活動の目的〉

【多世代交流の機会を創出し、地域と若者のつながりを深め、城山地域の魅力を発信する】

- ・ 小学校での授業援助
- ・ 地域イベントへの参加
- ・ 農園活動 など

これらを通じて世代を超えた交流の場を提供し、地域の結びつきを強化することを目指します

〈活動に見込める効果〉

1. 世代間交流の促進

小学校での活動

→ 子供たちと関わることで新たな価値観や観点を広げられる

2. 地域の活性化

地域イベントへの参加

→ 高齢者との関わりが増えることで新たなコミュニティをつくることのできる

3. 若者の社会貢献意識の向上

→ 地域の課題に直接かかわることで社会問題への関心が高まる
また、活動を通じて色んな世代とのコミュニケーション能力が育まれる

〈今年度の活動〉

- 6月 梅もぎ
- 7月 津久井湖夏祭り 準備
- 8月 津久井湖夏祭り 本番
- 10月 e-bikeツアー(安全講習会)
湘南小学校訪問
カワラノギクお花見会
- 11月 つくい湖湖上祭
秋のオレンジコンサート
- 12月 モルック大会
サンタdeコンサート (小学校)
- 2月 e-bikeツアー
(試走会・最終確認)
- 3月 e-bikeツアー(本番)

〈活動で得られた成果〉

- ・ 地域のイベントに参加することで様々な年代の地域の方と交流することができた。
- ・ 多様な価値観に触れ、考え方の幅を広げることができた。
- ・ 城山地域の現状を見つめながら、地域の歴史と未来について自ら考える意識を持つことができた。
- ・ 城山地域の魅力を再認識することができた。

〈今後の課題点〉

- ・ どの活動に力を入れていくか明確にしていくこと
- ・ しroyamaふれんず内での交流を増やし、様々な活動での連携をとりやすくしていくこと
- ・ 地域イベントにおいて全体的な状況を一人一人が把握しやすいよう工夫すること



若葉台プロジェクト



活動地域：相模原市緑区 若葉台住宅

今年度の活動

社会課題：少子高齢化 空き家問題

活動の目的

若葉台住宅は、郊外のベッドタウンとして形成された背景から、**第1世代の高齢化**と次世代への住宅継承の困難により**空き家化**の課題を持つ。また、地域のイベントでは**参加世代が固定化**し、世代間交流が活発ではない。

そこで、若葉台プロジェクトは大学生ならではのアイデアを活かし、これらの課題を解決して地域を活性化することを目的として活動している。具体的には、これまでの高齢者を対象としたサークルやイベントに加え、多世代が参加できるイベントを企画・運営することを目指している。学生が高齢者と子どもたちをつなぐ架け橋となり、世代間の交流を活発にすることが狙いである。

昨年5月に結成したプロジェクトであるため、今年度は地域の人との交流とプロジェクトの存在を周知してもらうことを目標に活動を行った。例えば、毎週「若葉台住宅を考える会」(若葉台住民からなる地域の課題を考える住民組織)が開催しているコミュニティカフェ「YYわかば」に参加し、お手伝いとしてカフェの運営を行いながら、地域の方々と積極的に交流を図った。

また、プロジェクトの活動を知ってもらうことを意識し、夏祭りやクリスマス会などの既存の地域イベントに参加した。クリスマス会では、子供たちに向けたイベントを企画・運営し多世代交流の機会を増やした。さらに、自主企画として実施した「若葉台ヒストリー」では、若葉台についての理解を深めることを目的に、地域の歴史や魅力に焦点を当てた活動を行った。

活動により見込める効果

① 多世代交流の促進

地域イベントへの参加が高齢者に偏っている現状を踏まえ、学生が若者と高齢者の橋渡し役となり、多世代の交流を活性化できる。

② 子どもたちが楽しめる場づくり

「若葉台ふるさと計画」を通じて、子どもたちに地域での楽しい思い出を増やし、地域への愛着を育む場を提供できる。

③ 新たな視点での地域課題へのアプローチ

学生ならではのアイデアを取り入れることや、行動力を生かし学童などの新たなセクターとの繋がりを創出することで、高齢化が進む地域に新しい視点から課題解決策を提案できる。



活動で得られた成果

5月に発足してからコミュニティカフェのYY若葉や夏祭りなどのイベントに参加し、積極的に地域の方と交流をおこなった。それにより、若葉台プロジェクトとして学生が若葉台で活動を行うことや顔を覚えてもらうことができた。その結果、1月に行った自主企画「若葉台ヒストリー」では、参加者が47名も集まり自治会館が満員となった。予想以上の反響となり、普段このような会に参加されないような方たちを巻き込むことができた。また、地域の方との交流の中で、学生に対する要望や活動のアイデアをいただくことや、若葉台住宅設計者である井上氏の講義から、若葉台住宅の特性や課題点を知ることができた。

来年度の活動につながる学びと気づきを得られたことや、住民の方とのネットワークを広げられたことは大きな成果であった。

今後の課題点

① プロジェクト内外の連携強化

地域の方と頻繁に連絡を取る機会が少なく、さらに連絡が個別になってしまったため、イベント開催時に認識のズレが生じた。またプロジェクト内でも、情報共有の仕組みが整っていないため、円滑な連携が取れなかった。

② イベントの宣伝方法

子どもや保護者からのプロジェクトの認知度が低く、子ども向けイベントを開催する際の集客が課題となることが想定される。今後はPTAや地域で子ども向け活動を行う方々となつながりを持ち、効果的な宣伝方法を検討したい。

秋チャレ

あつまれ緑区プロジェクト



活動地域：相模原市緑区

**社会課題：若い世代向けの地域の魅力
発信の不足**

活動の目的

相模原市緑区の区政策課より依頼を受けた区内のPR活動。

メンバーが現地へ行き、取材をして、それらをプロジェクトのSNSや市のホームページ、広報誌などの紙媒体を通じてPRしていく。

PRのターゲットは、若い世代や子育て世代をメインに絞り、紙媒体やホームページで幅広い世代にも知ってもらえるよう工夫していく。

また、緑区内で活動しているプロジェクトの周知も行っていきたい。

活動により見込める効果

メディアを通じた情報発信で、より多くの人に自分たちの活動や区の魅力を知ってもらう。

さらに学生目線のSNS投稿で、気軽に区のことを知ってもらう。

緑区内で活動するSICの他プロジェクトの活動取材し、広めることで他プロジェクトと連携する。



今年度の活動

- ・区政策課の方々との会議
- ・小松コスモス園 取材、投稿
- ・小原宿本陣祭 取材、動画投稿
- ・津久井湖湖上祭 取材、投稿
- ・ノイロ（カフェ）取材、投稿
- ・相模湖MORIMORI 取材、投稿
- ・e-bikeモニターツアー 取材

区政策課の方々や区民会議に参加されている地域の方とお話しさせていただいた。

区政策課の方の意向や地域の方のおすすめの場所に取材に行った。

取材では、写真撮影や動画撮影、インタビュー撮影を行った。

そして、各種SNSアカウントを作り、取材で得た素材をもとに投稿を作りSNSで発信していている。

活動で得られた成果

地元の方々や区政策課の方々、区長、市長との交流ができ、人脈を形成した。

区内のイベント情報の獲得
活動に参加するたびに、新たに他の活動を紹介してほしいという依頼を受け、区内の情報を得た。

SNS投稿やその内容を編集することで、情報発信に係る技術を向上させた。

今後の課題点

- ・取材から投稿までに時間がかかった
- ・フォロワーを増やす
- ・人手不足
- ・編集技術の向上



ホーセイイノベーションクラブ Team Circulation



活動地域：多摩キャンパス

今年度の活動

社会課題

夢や目標を持った学生が出会う機会が少ない
多摩キャンパスのブランディング

多摩祭

廃油を使用したキャンドル制作体験会を実施。
予想を上回るお客さんが訪れた。
SDG sに興味がある方はもちろん、無関心だった
方にも身近なもので環境問題を考えてもらった。

活動の目的

ここから始まる、自分イノベーション
No boundary, Do innovation!

夢や目標を持った学生が出会い、自発的な情報交
換や意見交換が生まれる場所作りを行っている。

映画上映会

円芝にて「プラダを着た悪魔」を上映。
「あなたの一番大切なものは何ですか？」という
サブタイトルの下、参加者に私生活における大切
なものを見つめなおしてもらった。

活動により見込める効果

自分を見つめ直す機会づくり

夢や目標を持った学生が主体性を持って、同志
と情報交換や意見交換などをする場所や、そのよ
うな仲間と出会う機会の創出。「好き」や、「や
りたい」の気持ちに向き合う時間を創りあげる。

同じ価値観はもちろん、違った意見の人との繋
がることによって、新たな発見や価値観をクリエ
イト！

分野にとらわれず学生の興味を引く取り組みを
行う。それによって学生が大学生活におけるイノ
ベーションを起こし、それが互いに影響しあう循
環が起ることを期待する。

イノスペ

社会学部棟のPatioを改修し、学生のためのイノ
ベーションスペース（イノスペ）を作る計画が進
んだ。レイアウトなどのハード面は大まかに決ま
り、運用方法や実施する企画などのソフト面も大
筋は決まった。2025年12月オープン予定。

活動で得られた成果

学生が何に興味があり（ニーズ）、どんなアプ
ローチを取れば良いか理解できた。

また、全イベントに共通して「知名度向上」が
目的であり、まだまだ成長の余地はあるが、去年
に比べ認知が広まった。

しかし、改善点が多く見受けられ、今後のイベ
ントに活かしていく。



今後の課題点

インプット・リサーチ・バックアップ

「日の下に新しきものなし」「センスは知識から始まる」を
心に刻み、議論を重ねる。

加えて、学生の求めているものの解像度を上げ、イメージの
乖離が起きないように修正しながら活動する。

そして、トラブルが起きないように予備案の予備案まで準備
し、安心・快適にイベントに参加してもらう。

ホーセイイノベーションクラブ Team Ethical



活動地域：多摩キャンパス、周辺地域

**社会課題：孤独感の顕著化
／学生の栄養の偏り**

活動の目的

今年度の活動では、学生の交流機会を増加させることによって「コロナ禍を経た学生の孤食問題」の改善を図るとともに、上京などの生活環境の変化により自らで食を選ぶ機会が増えた「学生の栄養の偏り」について、自らの食生活を見直す機会を提供することで改善を目指してきた。

また、都市部のキャンパスとは異なる「多摩キャンパスならではの良さ」を発見・提供するために、積極的に町田市や相模原市の食材を使用することで、遠方から通う学生たちに多摩地域の食の魅力を紹介し、興味を持ってもらうことを目標としている。さらに、食を通じて学生と販売者や提供者の人々をつなげる機会を設けることで、「食」で地域と学生、多摩キャンパスを豊かにしていくことも目的としている。

活動により見込める効果

本活動を通じて、「学生の孤食や栄養の偏り」といった課題の改善が見込まれる。学食以外にもキャンパス内での「食」に関する交流機会を増加させ、栄養バランスの摂れた食事を提供する場を増やすことで、コロナ禍を経た学生の孤食問題の改善や、学生の健康的な食習慣の意識向上も図れるだろう。

さらに、多摩地域の食材を活用することで、新鮮な地元食材を味わえ、地域住民の方々との交流機会が豊かになるなど、都市部のキャンパスでは得られない「多摩キャンパスならではの良さ」を体験する機会を提供することができる。それにより大学周辺地域への関心の高まりや、学生と販売者・提供者とのつながりの深化も期待される。



今年度の活動

今年度は、例年多摩キャンパスで開催されている「多摩夏まつり」や「多摩祭」への参加だけでなく、Ethical独自のイベントも企画・開催してきた。

EthicalのInstagram公式アカウント上に投稿した「ベストワングルメ」では、多摩キャンパスに通う学生たちにインタビューを行い、学生の地元のおすすめのご飯屋さんや、留学生の母国料理や食文化についての紹介を行った。

また、NPO法人やまぼうし「スローワールド」さんの協力のもと、10/22～10/24の3日間でヨーロッパをコンセプトとしたランチを提供する「EAT LOCAL」や、「スポーツブランディング」の資金支援を得て「たまらば佐野川プロジェクト」との共同で12/10～12/13の4日間で100円で朝食を提供する「100円モーニング」の企画も開催した。

さらに、西八王子で行われる「西八王子ハロウィンイベント」への参加や、「いもきちや」と「JA町田アグリハウスさかい」さんの協力を得て多摩キャンパスで焼き芋と野菜を販売する「八百屋企画」など、地域の方々と協働したイベントも行った。

活動で得られた成果

「EAT LOCAL」や「100円モーニング」などの学内での食事企画では、栄養バランスの摂れた食事と、新たな交流機会を提供する場となった。また、NPO法人やまぼうし「スローワールド」さんの協力のもとエッグドームのカフェテリアで行ったこともあり、学内での知名度の向上も得られた。特に、「100円モーニング」では、各最寄り駅と多摩キャンパスを繋ぐバスの混雑緩和にもつながっていたとの声を頂いた。

さらに、「EAT LOCAL」や「ベストワングルメ」では、留学生の食文化に焦点を当てたこともあり、食の異文化交流を図り、学生たちの食への関心を高めることにもつながっただろう。

「西八王子ハロウィンイベント」への参加や「八百屋企画」では、地域交流の機会や地域での活動認知も得られた。

今後の課題点

今年度の活動では、学内イベントでの地域食材の活用不足が感じられたため、来年度以降、学内でのイベントに販売する食事に、より地域食材を活用していきたいと考える。

また、学内でのモーニングやランチ企画などでは、プロジェクトチーム内での会議のみで決定せず、SIC外の学生の意見の反映もできるとより望ましいだろう。

ホーセイイノベーションクラブ Team Fashion



活動地域：多摩、八王子（めじろ台）

社会課題：地域のつながりの希薄化

活動の目的

—私たちTeam Fashionは、「多摩キャンパスで自己表現する場を作りたい」、「ただ単位を取るだけの大学生活は嫌だ」、そんなモヤモヤを持ったメンバーが集まり、2022年に設立されたチームです。「ファッションを楽しみ、自己表現する場を」をキャッチコピーに法政大学多摩キャンパスや多摩地域に自由にファッションを楽しみ、自己表現をできる環境を作る活動しています。私たちは現在、一年生7人、二年生9人、三年生1人、四年生1人の計18人で活動しています。今までの活動を通じて生まれた縁が広がり、現在は多摩キャンパスだけにとどまらず、東京都八王子めじろ台地域でも行っています。

活動により見込める効果

「地域・年齢を超えてファッションで繋がる」ことができることが主な効果です。

古着交換会やワークショップでは、服やアクセサリーの交換・販売を通じて法政大学の学生と交流することができます。

七タイイベントやハロウィンイベントでは浴衣や仮装などイベントに合わせたファッションを通じてめじろ台の子供たちと交流することができます。

ファッションショーでは自分たちがアレンジした衣装を通じてランウェイを歩く地元の方と交流することができます。

このように一年を通じてファッションを通じて様々な人と繋がることのできるのが私たちの活動に見込める効果です。



今年度の活動

2024年度は「地域・年齢を超えてファッションで繋がる」をテーマにした多くのイベントを開催しました。

4月の新入生歓迎イベントに始まり、春学期はテーマを決めて行う写真撮影会&写真集作成や古着交換会などファッションを多摩キャンパスの人々に身近に感じてもらえるようなイベントを開催しました。

夏頃は、多摩キャンパス主催の多摩夏及び多摩祭に出店しました。また、めじろ台の七タイイベント、都内で開催したDJイベントなど、多岐にわたる活動を行いました。

秋頃は引き続きめじろ台にてハロウィンイベントを開催しました。ピニャータやハロウィンにまつわるクイズなど小さな子供たちが楽しめる演目を実施しました。

冬には、活動の集大成であるファッションショーを開催しました。春の古着交換会で集まった古着にメンバーが刺繍などを加え、その衣装を着た学生や地域の方がモデルとしてランウェイを歩きました。

活動で得られた成果

古着交換会やワークショップでは、来客した学生との交流だけでなく、今年新しく入ったメンバーとの親睦を深めることもできました。

7月の七タイイベントや10月のハロウィンイベントでは約30人ほどのめじろ台の子供たちと交流することができました。

11月のファッションショーでは、めじろ台のコーヒESHOPや法政大学の軽音サークルがイベントを盛り上げるために協力してくれました。協力の甲斐あって、地域・年齢を問わず、40人以上の観客を集めることができました。

以上の成果から本年度のイベントのテーマであった「地域・年齢を超えてファッションで繋がる」を実現できました。

今後の課題点

一年を通じてたくさんのイベントを企画・開催しているため、準備にかかる時間と人員が足りなくなってしまう、一部のメンバーに仕事が集中してしまうことが課題点です。どのイベントに注力すべきかしっかり優先順位をつけて事前に計画をしっかりと立て、仕事を配分することで改善していきます。

SIC 学生スタッフ

活動地域：法政大学多摩キャンパス

**社会課題：SIC自体の周知不足
SIC内外との連携不足
情報発信の分散**

活動の目的

主にソーシャル・イノベーションセンター(SIC)をフィールドとし、**学生自らが、学生目線のアプローチでSIC全体の運営を行うことを軸とし、活動**している。上記の課題を解消するため、

- ①SICの魅力化・盛り上げ
- ②イベントの企画・運営
- ③プロジェクト間の連携の促進
- ④各活動への窓口

の大きく分けて4つの役割を担っている。

活動により見込める効果

SICの魅力化や盛り上げにより、学生、学校の教職員、地域の方々など、多種多様な人にSICを認知・利用してもらい、**広く意見交換ができる場**にする。それにより、SICの取り組みが、それぞれが対象とする社会で**よりたくさんの、またより質の高い活動ができるようにする**。また、既にSICに関わっている学生にもセンターを「拠点」として日常的に利用してもらい、**SICへの帰属意識を向上**させる。このようにして、**SICの取り組みの質を向上**させていきたい。

さらに、私たち学生スタッフが主催する企画を通して、個々で活動しがちな学生プロジェクトの**連携、相互理解**のきっかけを作る。

また、多くの取り組みが個々に動いているため分散してしまっていた情報発信の場を場を統一し、SICに興味をもった方々が、求める情報にアクセスしやすいような情報発信の効率化を目指している。このようにして学内外へ積極的に情報発信をすることで、**SICの存在感を強めていきたい**。

今年度の活動

- 4月 新歓祭
新入生ガイダンス
新歓WEEKS
コミュニティデザイン論にてSIC紹介
- 6月 代表ミーティング
現代福祉学部基礎演習にて出張授業
- 8月 オープンキャンパス
- 9月 多摩地域形成論にて出張授業
- 10月 中間報告会
- 12月 SICカフェ(パワポ講座)
多摩シンポジウム
- 3月 地域交流DAY

通年でXやInstagramの運用、Webサイトの作成を行ってきた。

活動で得られた成果

新入生ガイダンス、新歓祭、新歓WEEKSを通して、多くの学生プロジェクトで大幅なメンバー増加に成功した。また、秋チャレも含め、昨年よりも学生プロジェクトの数が5つ増え、**学内でSICの知名度が高まってきている**と考えられる。学部への出張授業やSIC紹介の機会も複数回いただき、**SIC全体の広報としての役割**を果たすことができた。

オープンキャンパスでは、昨年の反省を生かし積極的な呼び込みを行った結果、昨年よりも合計来室人数が24人増加した。本学に興味をもつ高校生に向けても、**SICの存在をアピール**できた。

また、昨年から作成していたSICのWebサイトを完成させることができた。今後は各種SNSに加えWebサイトの運用にも力を入れていきたい。

以上のように、1年を通して**学内外へのSICの周知に成功し、SICのさらなる周知に向け情報発信の場を統一する場を整える**ことができた。

今後の課題点

今年度の活動の課題点として、学生プロジェクト連携企画を当初の予定通りの頻度で開催できなかったことが挙げられる。今年度企画した中で連携企画の在り方、進行の仕方に反省点が挙げられたため、今後の**進め方を再考**していく。

また、Xの運用が活発だった一方でInstagramの更新が滞ってしまった。Instagram、X、Webサイトそれぞれ異なるアプローチで情報発信できるプラットフォームであるため、今後は**並行して活発に更新**していきたい。Webサイトについては、SIC外への情報発信の場としてだけでなく、**プロジェクト同士の連携のきっかけ**にもなることを目指す。学生プロジェクトが自ら更新することで、互いの活動に関する情報を目にする機会を増やし、さらなる**相互作用**を生むものにしたい。



SIC ボランティアスタッフ

活動地域：相原（町田市）

今年度の活動

社会課題：防災

活動の目的

今年度の活動目的は防災意識を広めることにある。災害に対する意識が薄れる昨今において、学生が防災の意義を説くことによって地域の方に今一度考えてもらおうという意図がある。また、ただ防災の知識を伝えるだけでなく、実際の状況において使える知識（実践）を伝えることを第一に考え伝えている

5月：学生天国

→ナマズの学校（防災カードゲーム）

9月：竹カフェ

→地域住民の方に向けてキャンパスツアー、防災食品の試食等

11月：まちカフェ

→クイズ、防災マップ作り

3月：竹カフェ

→ボッチャ

活動により見込める効果

- ・活動に見込める効果としてはより多くの人に防災を考える機会を与えることである
- ・大学周辺地域とのコミュニティの形成

（まちカフェ：防災マップ作り）



活動で得られた成果

- ・防災意識の浸透
→主にこどもと高齢者をターゲットに防災の意義を伝えることができた。
- ・大学周辺地域との関わりの拡大
→竹カフェからのつながりでこどもセンターぱおさんに声をかけてもらい、防災フェスティバルに参加、このほかにも相原地区の町内会にも顔を出す機会もあった。

今後の課題点

課題としては地域に根差した活動を増やすことである。様々なところで防災に関する活動をしているが、これからは地域と一体となった取り組みを行いたいと考えている。特に大学と周辺の地域の結びつきを強めるための役割を担いたいと考えている。

学生スタッフによる SIC ホームページの開設

SIC 学生スタッフは、学生自らが学生目線のアプローチで SIC 全体の運営を行うことを軸とし、活動しています。

2024 年度の活動では、情報発信を強化し、SIC の魅力を一層高めることを目的として、SIC の活動紹介 Web サイトを作成しました。サイトの作成にあたっては、SIC 所属の学生プロジェクト（学生ボランティアスタッフも含む）や SIC 課外教育プログラム「たまらぼ」に参加したチームへの取材を重ね、学生たちの取り組みをより詳しく知ることのできるサイトとなっています。今後も SIC 学生スタッフが中心となって、SIC で活動する学生たちの様子を随時更新していきますので、ぜひご注目ください！



SIC 活動紹介 Web サイトのトップ画面



SIC 学生スタッフ作成
SIC 活動紹介 Web サイトは
こちらの QR コードよりご覧ください



SIC 教員プロジェクト

SIC では、学生のみならず、教員によるプロジェクト活動を支援しています。特集で紹介した「CAMP in Campus」のほかに、活動している教員プロジェクトをご紹介します。

人馬のウェルビーイング

多摩キャンパスの城山校地は体育会馬術部の活動拠点となっており、部員たちは 10 頭ほどの引退競走馬と共に日々体育会活動に励んでいます。その馬術部が中核を担う『人馬のウェルビーイング』は、地域社会において子供や障害者を含む人々と、引退競走馬をはじめとする「馬」との関わりを深め、人馬双方の健康で幸福な暮らしの実現を図る、本学発祥の活動です。主に引退競走馬を用いた事業活動および文化を、地域の人々との良好な関係のもと、持続可能かつ発展的に推進することを目的に、2024 年 6 月には「人馬のウェルビーイング研究所」（大学院特定課題研究所）を設置し、多角的な活動を展開しています。

まず、地域連携活動の一つとして、城山校地で日常的に排泄される馬糞を利用した循環型経済活動に取り組んできました。具体的には、馬術部馬場の隣接地に「人馬のウェルビーイング農園」を開墾し、馬糞堆肥を用いて江戸東京野菜を栽培しました。地域住民の皆様へもその馬糞堆肥を提供しており、単に競技での勝利を目指すだけでなく、地域連携にも力を注ぐ「新たな体育



会」のあり方を示しています。

さらに 2024 年度には、SIC の新たな学生プロジェクトとして「法政馬広場」がスタートしました。地域の子供たちへ馬との触れ合いやウェルネス乗馬を提供できるよう、学生主体で企画・運営に取り組んでいます。こうした学生プロジェクトの始動は、人馬のウェルビーイングをめぐる本学の取り組みに新たな広がりをもたらすものとして、今後の展開が期待されます。

スポーツブランディングラボ

法政大学中期経営計画「HOSEI2030」における多摩将来計画推進委員会の直下に置かれた研究プロジェクトとして活動を始めました。2023 年度の SIC 発足以降、多摩キャンパスの強みである“法政スポーツ”を広く認知し、体育会学生を応援してもらえることを目指し、SIC 教員プロジェクトとして活動しています。2024 年度の活動では、主に 3 点挙げられます。

①100 円モーニング企画への協力

SIC 学生プロジェクト「Team Ethical」と協働した 100 円モーニング企画に加わり、管理栄養士（スポーツ健康学部卒業生）によるメニュー監修に協力しました。



②SIC カフェの開催

同ラボが主催となった SIC カフェを企画し、2 人のゲストをお招きしました。日本郵政株式会社スポーツ&コミュニケーション部部長の千葉岳志氏からは日本郵政株式会社における女子駅伝の取り組み、さらに陸上競技部長距離チームの坪田智夫監督からは本学陸上競技部員の活動や箱根駅伝に向けた裏話などをお話頂きました。

③学生トレーナーの動画制作

今年度より多摩キャンパスのブランディングの一環として、学生の活動を動画にして紹介する取り組みに着手し、その一環としてスポーツ健康学部 AT ルームの学生トレーナー活動に焦点を当てた動画を作成しました。今回の動画ではアスレティックトレーナーの資格取得を目指した学生トレーナーが行っている実習の様子だけではなく、実際に体育会の公式戦の場で選手のサポートをしている様子も撮影し、それぞれの活動が相互の学びに結びついていることに着目した内容となっています。



こちらの QR コードから動画の全編をご覧いただけます。
動画 (YouTube)
「法政スポーツを「支える」学生トレーナー」



SIC 教育プログラム「たまらぼ」



多摩キャンパスは山間地域と都市郊外のちょうど中間あたりに立地しており、さらに、社会課題について学ぶ学部が集まっています。その特徴を生かし、社会課題の解決に向けて持続的に活動する「社会的起業」を目指す学生を支援するプログラムとして、NPO 法人 ETIC. の協力を受け、2023 年度に新たな課外プログラム「たまらぼ」を新設しました。たまらぼの理念は「自ら行動して新しいチェンジを生み出すための場」。実践に重きを置いた講座やメンターによる伴走支援によって、学生たちのチャレンジをサポートしていきます。

チェンジメーカーズ ラボ in 多摩（通称：たまらぼ）

地域や社会の課題が複雑化・多様化していく中、創造的なアイデアや行動で、現状を変えていく「Changemaker（チェンジメーカー）」が、今まさに求められています。

SIC では、チェンジメーカーや起業家など、現状から課題解決の突破口を見いだして行動していく人達が集う新たなプログラム「チェンジメーカーズラボ in 多摩（通称：たまらぼ）」を2023 年秋学期に立ち上げました。

2 年目となる今年度（2024 年度）は、5 つのチームがプログラムに参加し、約 3 か月にわたるプログラムを受講し、自ら考え行動することを第一にそれぞれの社会課題に向き合いました。



プログラムの特徴

1. 同世代コミュニティと専門家によるバックアップ

起業やチェンジメーカーになることを目指す同世代の仲間が集い、相互に刺激を与え合いながら、課題解決への道筋を探ります。また、大学や、社会起業家を目指す若者支援に取り組んできた NPO 法人 ETIC. のコーディネーターをはじめ地域の間支援コーディネーターも加わり、学生のプロジェクトの加速を全面バックアップします。

2. 講座やフィールドワーク、メンタリングなどからなるプログラム

講座やフィールドワークなど多様な内容で構成されるプログラム参加を通じて、プロジェクトが磨かれていきます。学んだ知識をもとに、プロジェクトを持続可能にするためのビジネスモデル構築や、リソース調達について学ぶことができます。

3. 優秀な活動に対しては大学からの支援金も！

優秀な活動には、大学から支援金（最優秀賞 30 万円、優秀賞 10 万円）が贈られます。

また、プログラム参加後も、引き続きの活動をサポートします。

プログラムで大切にしていること

1. 小さくても行動を起こすことを重視する

⇒インタビュー、アンケート等、顧客の声を聞く。

2. PDCA サイクルを小さく何回も回す

⇒週報やコーディネーターの面談を通じて振り返り、次につなげる。

3. メンバー同士の関係性

⇒相互に切磋琢磨し、刺激を与え合う仲間であれるような場を作る。

4. コーディネーターは見守り役と問いかけ役

⇒類似する事業や、機会の情報は惜しみなく提供する。本人の中にある想いや大切にしたいことを問いから引き出し、活かす。

2024 年度のプログラム内容

第 1 回：キックオフ（社会や地域に変化をもたらすプロジェクトの立ち上げ方）

第 2 回：大場勇弥氏（フリースクール CAS!CA 代表）レクチャー
ターゲットの深堀り・ペルソナ確定
＋オフィスアワー（個別相談）

第 3 回：課題解決のシナリオづくり＋オフィスアワー

第 4 回：高野俊行氏（ユニクル株式会社代表）レクチャー
リソース調達の方法＋プレゼンのシナリオ作り

第 5 回：プレゼンテーション会（DEMO DAY）



2024 年度の学生たちが取り組んだテーマ

- ・バス通学を便利に 乗り換え×飲食店紹介アプリ「たまっぷ」
- ・カフェで紡がれる 若者のための居場所プロジェクト
- ・学んだ後はソクメシ！多摩キャンパスのランチ問題を解決するデリバリーサービス
- ・多摩地域密着の美大生・中小企業のためのマッチングプラットフォーム
- ・映えトウク 町田市を対象にした若者が考える若者ためのツアー開発

たまらぼ DEMODAY

たまらぼプログラムの最終回には、それぞれのチームによる最終発表会「DEMOMDAY」が行われ、優秀なプレゼンには大学から支援金（最優秀賞 30 万円、優秀賞 10 万円）が贈られます。

2 年目のプログラムとして行われた今年度は、2024 年 11 月 5 日（火）、Startup Hub Tokyo（東京都立川市）にて、「DEMO DAY」が開催されました。この「DEMO DAY」には、プログラムに参加している学生のほか、地銀などの金融機関、町田市や八王子市で地域活動を支援する組織などからもご参加いただき、オンライン視聴も含めると約 50 名が集まり、活気のあるイベントになりました。

当日は、たまらぼプログラムに参加した 5 チームが 7 月からの取り組みの成果報告としてプレゼンテーションを実施しました。外部審査員からの質疑も行われ、緊張感のある時間が流れていきました。

審査員による審査の結果、最優秀賞 1 チーム、優秀賞 2 チームが選ばれました。

【審査員】

- ・石橋 孝太郎 氏
(Gazelle Capital 株式会社 代表取締役)
- ・高井 大輔 氏
(特定非営利活動法人プラス 事務局長)
- ・森林 育代 氏 (株式会社シーズプレイス 代表取締役 /Startup Hub Tokyo TAMA コンシェルジュ)

【結果】

最優秀賞：バス通学を便利に 乗り換え×飲食店紹介アプリ「たまっぷ」



優秀賞：学んだ後はソクメシ！多摩キャンパスのランチ問題を解決するデリバリーサービス

優秀賞：カフェで紡がれる 若者のための居場所プロジェクト





交流する ～CAFE～

SIC では、ゲストを招いて、学生も、地域も共に学び、“語り合う場”として「SIC カフェ」を開催しています。カフェでの学びをきっかけに、新しい活動のヒントになったり、人との出会いによって日常が少し豊かになったり、そんな学びと出会いの気軽な交流拠点を目指します。

SIC カフェ

第1回(2024年6月5日)「若葉台住宅を知る～若葉台プロジェクトキックオフ」

今年度から立ち上がった新たなプロジェクト「若葉台プロジェクト」のキックオフを兼ね、若葉台住宅の紹介と交流を行うカフェを開催しました。当日は、若葉台住宅を考える会、若葉台自治会、今井裕久氏（法政大学デザイン工学部非常勤講師）の方々からお話を伺いました。

法政大学からほど近い城山エリアにある若葉台住宅は、黒川紀章氏がデザインし、郊外の高級住宅地として緑化率の高さ（50%）が特徴です。しかし、高齢化による移動（モビリティ）の問題や、商店街の衰退による買い物難など様々な課題に直面しています。当日は、若葉台住宅を設計された井上正良氏も参加されており、想定よりも早いスピードで進む人口減少、少子高齢化等の中、どう住民の暮らしを守っていくのかという課題認識が語られました。講演後は地域の方と学生が対話し、アンケート調査を行いたい、新たな取り組みであるグリーンスローモビリティに学生も乗って地域の方と交流したい等、意欲的な意見交換がなされました。



第2回(2024年7月3日)「八王子市の水辺を活かしたまちづくり」

八王子市水循環部の職員の方々をゲストにお招きし、八王子市の河川の特徴や水辺を活かしたまちづくりをテーマに開催しました。

赤尾隆範氏（八王子市水循環部水環境整備課・課長補佐兼主査）、町田真一氏（同課・主任）、佐藤佑紀氏（同課・主任）、安西広太氏（同課・主任）より、八王子市を流れる河川の特徴や水循環計画を始めとした河川に関わる政策などをご紹介いただきました。行政の視点で、八王子市の水環境がいかに改善されてきたか、それをこれからも維持していくためには何が必要か、など様々なお話を聞くことができました。また、水辺を活用した市民活動を支援する制度「水辺の水護り（みまもり）制度」についても紹介いただき、今後学生との連携を視野に入れたプロジェクトを実施していきたいとの提案がありました。八王子市の自然環境を維持していくために、自分たちにできることを考えるよい機会となりました。



第3回(2024年7月10日)「昆虫写真から社会を「読む」」



相模原市の津久井地区を活動拠点としている昆虫写真家・安川源通氏をゲストにお招きしました。安川氏が開催する教室にSIC学生プロジェクト「藤野やまなみプロジェクト」に参加している学生が参加したことがきっかけで、昨年度に引き続いてのカフェの開催となりました。

今回は、「昆虫写真から社会を「読む」」をテーマに、人間の行為が昆虫など他の生物に与える影響や生物多様性の大切さなど、1枚の写真からいかに撮影者の意図や情報を読み取ることができるのかをお話いただきました。対話形式の講演であったため、参加した学生との間でも様々な意見が交わされ有意義な時間となりました。

第4回(2024年7月11日)「Rethinking Design:建築から考えるデザインとイノベーション」

SICカフェの第4回目は、元多摩地域交流センターの地域連携コーディネーターをされていた星野善晴氏（デザイン工学部建築学科教務助手）と藤本貴子氏（デザイン工学部建築学科教務助手）をゲストにお招きし、デザインとイノベーションをテーマに開催しました。

まずは、星野氏より多摩キャンパスやSICの事例から、デザインとは「仕組み」を設計することであり、その仕組みの中でいかに新しい価値を生み出していくのかという意味で

「イノベーション」を行う人々が重要な役割を果たしているのだというお話をいただきました。また、藤本氏からは大高正人氏の建築を事例として、設計者がいかなる意図をもって建築物を設計しているのか、またその「デザイン」が活かされるためにはその空間を「使用する」人々の行為が重要になるとのお話をいただきました。

当日は、学生が20名以上参加しており、「これまで自分たちが取り組んできた活動がデザインだったことに気づいた」「今後取り組もうと考えている居場所づくりに生かしたい」などの感想が聞かれ、盛会となりました。



番外編:2024 年 6 月 26 日「〈学生による活動紹介〉相模原で取り組む子どもの居場所づくり」



6 月には SIC カフェの番外編としてお昼休みの時間を活用した「学生による活動紹介」の会を実施しました。自主的に学外活動に取り組む学生が自らの活動内容や活動への思いを紹介することで、新たな出会いやコラボレーションが生まれることを期待した企画です。

当日は、それぞれの場所で子ども食堂などの居場所づくり活動に取り組む学生が集まり、情報交換や活動における悩み事の相談など活発な交流が行われました。

第 5 回(2024 年 10 月 16 日)「地域の企業で働くリアル～町田の経営者と交流しよう～」

多摩キャンパスが所在する町田市で会社を営んでいる方々をお招きして開催いたしました。登壇されたのは粉奈里衣氏 (web studio N&S 株式会社 代表)、渋谷清史氏 (株式会社 ぐらしの窓保険 専務取締役) 畑中健佑氏 (町田コンディショニングジム健介代表)、奥澤高広氏 (株式会社 クロニクル 代表取締役) です。



カフェは座談会形式で行い、和やかな雰囲気の中、学生との間でざっくばらんに話をさせていただくことができました。学生からは町田市で働くようになったきっかけや起業をした経緯などの質問が飛び交い、登壇者の方々もそれに対して地域への思いや経営のリアルについて丁寧にお答えくださいました。地域のために働くということの意味について改めて考えることのできる機会となりました。

第 6 回(2024 年 11 月 18 日・19 日・22 日)「学生スタッフ主催:パワポ・デザイン講座」



SIC 学生スタッフの山下友梨子さん (人間社会研究科修士 1 年) が講師役となり、パワーポイントの使い方やスライドのデザインについて学ぶことができる「パワポ・デザイン講座」を初級・中級・上級の 3 回に分けて実施しました。SIC 学生スタッフが初めて SIC カフェを主催する企画となりましたが、当日は 1 年生を中心に、SIC 内外の学生が多く集まったほか、若手職員も参加しました。

プレゼンテーションの資料やチラシ作りなど、大学生にとっても様々な場面で使用することの多いパワーポイントですが、その使い方について改めて学ぶ機会は多くありません。この講座では、パワーポイントの基本的な操作方法から、視覚的にわかりやすいデザインとはどんなものか、効率的にスライドを作る方法などを一つ一つ丁寧に解説し、普段、SIC のイベントや成果報告などでパワーポイントを頻繁に使う学生スタッフだからこその充実した内容となりました。

講座終了後には、参加学生から講座で使った資料データを送ってほしい、といった声も聞かれ、非常に満足度の高い内容だったことが伝わりました。

第7回(2024年11月20日)「ちがいを知ることから始める 学生と地域のつなげ方」

SICがコーディネートする多摩4学部共通科目「多摩地域形成論」のアフターセッションとして、同日の講義に登壇された八王子市第1層生活支援コーディネーターの今泉靖徳氏をゲストにお招きしました。多摩地域形成論の講義では割愛した過去の事例紹介も交え、館ヶ丘団地内のふらっと相談室長として活動されていた様子を改めてご紹介いただきました。

館ヶ丘団地は、SIC学生プロジェクトにおける活動場所の1つとなっており、プロジェクトに参加する学生もカフェに出席していました。毎週のように通うことで住民の方々の顔を見ると安心することもあるが、しっかりとコミュニケーションを取っていく大切さも改めて痛感した、との感想もあり、活動する学生たちにも共有していきたいと話していました。



第8回(2024年11月27日)「八王子の第6次産業へようこそ 新しい農業のはじめかた」



同日行われた「多摩地域形成論」のゲストで登壇された八王子市拠点整備部市街地活性課の川上寧子氏と、もぐもぐランドで八王子農業の第6次産業化を進める小山律子氏をお招きし、開催しました。

SICカフェでは、小山さんがプロデュースされたかぼちゃ、さといも、さつまいもなどのスープをおいしく味わいながら、野菜の触感を残すために開発に時間をかけたことなどをお聞きしました。これまで見栄えが良くないものは廃棄となっていた農作物をアップサイクルさせることで美味しいスープにしたり、ロスフラワーをブーケにしてより付加価値のある商品へと転換させたりしているそうです。参加学生からの質問も活発で、双方向の対話が盛り上がりました。

第9回(2024年11月28日)「法政スポーツをもっと楽しもう！」

SIC教員プロジェクト「スポーツブランディングラボ」が主催してのSICカフェ。30名以上の学生たちに集まって頂き、熱気あふれる会場となりました。

千葉岳志氏からは、スポーツビジネスの観点から現在所属されている日本郵政株式会社スポーツ&コミュニケーション部における事例をご紹介いただき、郵便ネットワークの特性を生かしたビジネス展開の一端を伺うことができました。

また、坪田智夫駅伝監督からは、ご自身の経歴を交えながら法政大学陸上競技部の生活、箱根駅伝の“ツウ”な見どころも含め、ざっくばらんに話いただきました。坪田監督からの「テレビに出ているスター選手でも、みんなと同じ大学生である。気軽に声を掛けてあげてほしい」との話には、参加した学生も一様に頷いていました。

後半に設けた質疑応答の時間では、実業団チームが果たすインナーブランディングの役割や、大学を代表して参加する学生たちへの応援方法、箱根駅伝の裏側など幅広い質問が出され、大変盛り上がりました。今後も“法政スポーツ”を盛り上げるイベントを通じて、スポーツを身近に感じてもらいながら、学生同士で応援していく風土を作っていきたいと考えています。





参加する ～EVENT～

SIC では、さまざまな主催イベントを通して、学生・教職員・近隣住民など外部の皆様とソーシャル・イノベーションを感じていただく機会も設けています。

多摩シンポジウム

多摩シンポジウムは、近隣地域への知的貢献および地域社会との連携を目的として、SIC が毎年開催しているイベントです。2024 年度は多摩キャンパス開設 40 周年を記念して「社会課題解決にチャレンジするソーシャル・イノベーター」をテーマに、様々な分野で活躍されている多摩キャンパスの卒業生 4 名をゲストにお招きし、講演とパネルディスカッションを実施しました。当日は、日頃から SIC とともに活動してくださっている地域の方々を中心に、約 70 名の方々にご参加いただきました。

【パネリスト】

- 木村 太一氏（MAGO MOTORS JAPAN 株式会社 取締役、経済学部 2010 年度卒業）
- 小笠原 舞氏（こどもみらい探求社 共同代表／下町ゲストハウスとまりぎオーナー、現代福祉学部 2006 年度卒業）
- 加藤 遼氏（株式会社 パソナ JOB HUB、社会学部 2005 年度卒業）
- 山下 千絵氏（SMBC 日興証券株式会社所属／パラ陸上短距離選手、スポーツ健康学部 2019 年度卒業）

【パネルディスカッション】

パネルディスカッションでは、SIC センター長の糸久正人社会学部教授が進行役となり、社会的課題の解決において大学という場所が果たす役割などについて議論が行われました。

また、登壇者の方々には会場からの質問にもお答えいただき、多摩キャンパスでの学びがいかに現在の活動に結びついているのかなどなどの話題も見られました。パネルディスカッションの最後には、SIC 副センター長の関司直也現代福祉学部教授より、大学という場を生かすとともに、様々な分野で活躍する多摩キャンパスの卒業生たちの力を資源として、地域社会の課題解決に取り組んでいくことへの可能性が語られました。

オープンキャンパス

8月3日・11日に多摩キャンパスで開催されたオープンキャンパスにおいて、ソーシャル・イノベーションセンター（SIC）の活動を紹介しました。



法政大学のオープンキャンパスは学生スタッフが主体となって企画・運営されており、SICのブースではSIC学生スタッフが参加しました。

オープンキャンパスでは志望する学部の説明会や個別相談、キャンパスツアーに参加されることが多いかと思いますが、SICでは「“多摩キャンパス”をめいっぱい楽しむ！」をテーマに、多摩キャンパスでの課外活動として、近隣地域に入っのプロジェクト活動や、ボランティア活動などをポスター展示、学生が撮影・編集したドローン動画などを通して、日常の活動の様子を紹介していました。

SICを訪れた来場者は学生スタッフの話を熱心に聞いてくださり、SICでのプログラムや学生プロジェクトの個別活動について会話も弾んでいました。中には「SICの取り組みに関心があり、オープンキャンパスに参加した」と話す来場者もあり、SICの取り組みやその成果を発信していくことの重要性を感じることもできました。

中間報告会

10月5日（土）、SICに所属する学生プロジェクトの中間報告会を開催しました。

学生PJは年度初め（今年度は5月）に助成金申請の審査会を受け、1年間の活動を行います。半年間の成果や課題、秋以降の活動計画などを共有する中間報告会は、各PJの活動状況を知るだけでなく、学生同士だけでなく、SIC運営委員会（教職員）との意見交換が行えることも大きな特徴です。

中間報告会には、PJ化を目指して秋学期から助成金を受けて活動する5つのチームや、学生ボランティアスタッフも含め、60名近くの学生たちが参加しました。

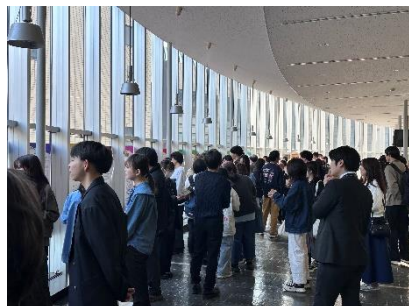
学部生には経験の少ない、ポスターセッション形式での発表で緊張感のある様子でしたが、フロアからの質疑も活発に出され、幅広く活動している様子をお互いに知ることが出来ました。また、後半のワークショップでは、PJ活動を進める中での困りごと、課題点などのテーマを持ち寄り、様々なPJのメンバーたちで意見を交わしていました。SICで活動するPJ同士がコラボした企画も生み出されており、この中間報告会をきっかけに新たな活動に繋がることを期待しています。



地域交流 DAY

SIC に所属する学生 PJ の年度末の活動報告会として「地域交流 DAY」を毎年開催しています。SIC の前身となる多摩地域交流センター（HUCC）開設時から続く「地域交流 DAY」は、学生プロジェクトの年度末の活動報告として開催しており、地域の方々と学生が今後の地域の在り方について語り合う場となっています。2024 年度は 2025 年 3 月 2 日（日）に開催いたしました。当日は暖かな陽気の中、150 名近くの方々にご参加いただきました。

今回の「地域交流 DAY」では、今年度の学生 PJ における年度末報告のほか、ポスターセッションおよび SIC の学生スタッフが企画したワークショップを開催しました。学生 PJ に参加している学生のほか、近隣地域の住民や関係機関の方々との活発な議論が行われ、盛況に終わりました。



その他のイベント

輪島塗救出チャリティーイベント

2024 年 12 月 16 日（月）、多摩キャンパス円形芝生広場を会場に、「輪島塗救出プロジェクト・チャリティーイベント」を開催しました。本イベントは、現代福祉学部水野雅男研究室が取り組む「ボランティアキャンプすず」の活動に参加した学生有志が、能登半島の被災地支援のために行ったチャリティーイベントです。フィールドワークに参加した学生たちが、能登半島地震により倒壊した家の被災者から許可を得た輪島塗の漆器を活用し行いました。イベント当日は、学生や教職員など多くの方々にご参加いただき、それぞれの寄付金額に応じた輪島塗をお渡ししました。

また、イベント前日の 12 月 15 日（日）には「多摩キャンパス開設 40 周年記念×第 40 回多摩シンポジウム」においても同イベントを開催し、多くの来場者の皆様にご協力いただくことができました。

このイベントを通して、皆様からいただいたご寄付は、本活動の元団体である「SAVEIWATE」を通して、石川県珠洲市の 10 の町内会および輪島漆器商工業協同組合等へお届けいたしました。





触れる ～VOLUNTEER～

SICにはボランティアセンターとしての機能もあり、地域・社会が求めるボランティア活動に学生の皆さんが参加する機会を提供しています。多様なボランティア・ニーズに触れることが地域社会の課題への気づきにつながります。

竹カフェ

「竹カフェ」は、相原地区協議会との連携事業として毎年開催している地域交流イベントです。2024年度は下記の内容で竹カフェを開催しました。

竹カフェ 1回目 防災イベント

1回目の開催（9月21日開催）は、「法大生によるキャンパスツアーと防災関連企画」と銘打ち、多摩オープンキャンパスリーダーズの学生スタッフによる多摩キャンパス周辺のバスツアーと、ボランティアスタッフによる災害用備品の実物展示、防災食と通常食の食べ比べと、防災に関するクイズ大会を実施しました。当日は、学生ボランティアスタッフ2名と、地域の方15名の計17名に参加いただきました。参加した方々からは、「楽しみながら防災の知識を学べて、とてもいい企画だった」「改めて防災の観点から普段の生活を見直そうと思えた」など、嬉しいお声をたくさんいただきました。



竹カフェ 2 回目 ボッチャ大会

パラリンピックの公式種目で、年齢や性別、障がいの有無を問わず、交流を深めるのに最適なパラスポーツ「ボッチャ」の体験大会を 2025 年 3 月 22 日に実施しました。

学生ボランティアスタッフ 2 名と、地域の方々 27 名の計 29 名が参加し、全 5 チームでの総当たり戦を行いました。

上位となったチームから、景品の法政グッズをゲットできる形式で、熱い試合が繰り広げられました。試合が進むにつれ、参加者全員が打ち解け、和気あいあいとした雰囲気となり、地域の方と学生の交流を深める良い機会となりました。



★学生天国★

「★学生天国★」は大学コンソーシアム八王子に加盟している 25 大学等に所属するサークルやゼミが、日ごろの活動や研究の成果を披露するイベントです。SIC 学生ボランティアスタッフは毎年参加しています。今年度は 2024 年 5 月 12 日

(日) に開催され、昨年に引き続き防災をテーマに、防災カードゲーム「なまずの学校」の体験ブースを展開。人の行き交いが多い八王子ユーロードでの出展でしたが、ブースにはコンスタントに参加者が訪れてくれました。



まちカフェ！

「市民協働フェスティバル『まちカフェ！』」は、町田市内で活動する NPO 法人や市民活動団体、地域活動（町内会・自治会）などが一堂に集い、活動発表などを通じて交流を深めるためのイベントです。100 を超える催しが行われるなか、学生ボランティアスタッフは、多摩ボランティアセンター時代（2016 年）から継続して参加しています。2024 年 11 月 30 日（土）に開催された今年度のまちカフェ！には、防災クイズとみんなで作る町田のマップづくりを実施しました。どちらも、お子様連れのご家族を中心に、50 組近くの方にご参加いただきました。特に、マップづくりではご参加の方々から地元町田の美味しいお店や景色のきれいな場所など様々な情報が寄せられ、大変盛況でした。町田市内で活動する様々な団体が一堂に会する大きなイベントということもあり、例年参加している学生は地域の方が声をかけられるなど、ブース出展だけでなく他団体の企画に参加することもでき、充実した経験を得ることができました。



また、佐野川プロジェクトも今年度初めて『まちカフェ！』に参加し、佐野川学生茶の販売を行いました。こちらも 30 組以上の方々にご購入していただくことができ、また、佐野川プロジェクトの活動を知ってもらうことのできる大変よい機会となりました。

防災フェスタ

2025年2月11日（火）には、子どもセンターぱお（町田市相原町）で開催された「防災体験フェスタ」にSIC学生ボランティアスタッフが参加しました。

今回の防災体験フェスタは、子どもセンターぱおが初めて開催したイベントで、当日は防災グッズの工作や非常食の試食、バケツリレーや心肺蘇生体験など様々な企画が実施されました。SIC学生ボランティアスタッフは、防災カードゲーム「なまずの学校」とクイズラリーを行いました。どちらも、お子様連れのご家族を中心に、50組近くの方にご参加いただきました。

また、SICとしても段ボールベッドや段ボールトイレで避難所体験ができるブースや、「Camp in campus」「ボランティアキャンプすず」の活動を紹介するブースを設け、こちらもたくさんの方に立ち寄っていただくことができました。



【学生ボランティアスタッフ】

SICには学生のボランティア活動促進のため学生ボランティアスタッフが所属しています。町田市相原地域の住民交流イベント運営のほか、地域のイベントへの協力などを行っています。

その他のボランティア活動(一部)

館クリーンセンター「煙突のぼり」イベント

2024年8月7日（水）、多摩キャンパスに隣接する館クリーンセンターにて行われた「煙突のぼり」イベントに、SICで活動する学生2名がボランティアとして協力しました。当日は市内の小学生と保護者合計20名が参加し、厳しい暑さの中、安全を確保しながら学生たちもイベント実施に協力しました。



相原スポーツ広場 FUN DAY

2024年11月10日（日）、町田市相原中央公園内にあるスポーツ広場で開催されたスポーツイベント「相原スポーツ広場 FUN DAY」にSICで活動する学生がボランティア参加しました。当日は、子どもたちに正しい走り方を教える「走り方教室」の運営を担当し、訪れた子どもたちの参加受付業務や、第二陸上競技部の学生と陸上競技経験のある学生たちによる走り方指導を行いました。





学ぶ ～CLASS～

多摩地域および社会全体の課題や、社会課題の解決に取り組む実践的な事例を知ることのできる授業やプログラムを通して、ソーシャル・イノベーションの考え方を学んでいきます。

多摩地域形成論

多摩キャンパスの4学部の学生が履修できる共通科目です。多摩キャンパス版の「法政学」として、多摩キャンパスを取り巻く地域社会（歴史・文化・経済・社会環境、そこに暮らす人たち）から多摩の現状や課題を考えていきます。

SIC 関連科目群

ソーシャル・イノベーションに関連する科目について「SIC 関連科目」として多摩キャンパスの学生であれば所属学部の専門科目以外にも受講できる制度です。

〈2024 年度 SIC 関連科目〉

ソーシャルイノベーション論（現代福祉学部）

コミュニティビジネス論（現代福祉学部）

ローカルイノベーション論（現代福祉学部）

中小企業論（社会学部）

コミュニティ・デザイン論Ⅰ（社会学部）

スポーツマーケティング論（スポーツ健康学部）

日本経済論 A/B（経済学部）

Business Research Seminar A/B（経済学部）

年間活動実績一覧

【各種イベントポスター】

SIC CAFE vol.02

八王子市の水辺を活かしたまちづくり
水辺の水遊び制度とガサガサ探検隊

2024.7.3 (水)
13:00-13:30

【講師】
八王子市環境・水産課 水産課長 永瀬 浩二
【司会】
八王子市環境・水産課 水産課長 永瀬 浩二

八王子市環境・水産課が主催する「水辺を活かしたまちづくり」の取り組みについて、水辺の水遊び制度とガサガサ探検隊の活動について、永瀬 浩二氏からご講演いただきます。水辺の水遊び制度とは、水辺の水遊びを安全に行うための制度です。ガサガサ探検隊は、水辺の水遊びを楽しむための活動です。水辺の水遊び制度とガサガサ探検隊の活動について、永瀬 浩二氏からご講演いただきます。

VOLUNTEER CAMP NOTO SUZU 交通費支給
参加学生大募集 2024 夏

前年参加者募集中、ボランティアキャンプで活動中

ボランティアキャンプとは、ボランティア活動とキャンプを組み合わせた活動です。ボランティア活動は、社会貢献活動であり、キャンプは、自然と触れ合う機会です。ボランティアキャンプは、ボランティア活動とキャンプを組み合わせた活動です。ボランティア活動は、社会貢献活動であり、キャンプは、自然と触れ合う機会です。

SICカフェ vol.3

昆虫写真から社会を「読む」

講師 安川 源通

7月10日 水 14:00～15:30

会場：法政大学多摩キャンパス 総合棟2階
申込：不要/途中入室可

SIC CAFE vol.5

就活応援セミナー
地域の企業で働くリアル
～町田市の経営者と交流しよう～

10月16日(水) 14:00～15:00
場所：ソーシャル・イノベーションセンター (総合棟2階)

Web制作 代表 山本 隆夫
フィットネスジム経営 代表 山本 隆夫
株式会社 山本 隆夫

HOSEI UNIVERSITY TAMA SYMPOSIUM
2024年12月15日 (日)

多摩キャンパス開設40周年記念
第40回多摩シンポジウム

社会課題解決にチャレンジする
ソーシャル・イノベーター

日時：2024年12月15日 (日) 15:00-17:30

佐野川プロジェクト さのさんぽ

開催日5/26 (日)8:50～17:00
集合 法政大学多摩キャンパス エグゼクティブ階段前

参加費 無料！お弁当付き！

定員達し次第終了となります
お気軽に遊びに来てください！
サクルー一同お待ちしております！

たまらぼ
チェンジメーカーズ博多
DEMO DAY

11月6日(火) 17:30-20:00
TOKYO創業ステージTAMA Startup Hub Tokyo (2211)

30万円

SIC Cafe

パワポ・デザイン講座

第1回 11月18日(月) 13:00-13:30
第2回 11月19日(火) 13:00-13:30
第3回 11月22日(金) 13:00-13:30

SICカフェ vol.7

学生と地域のつなげ方

11月20日 水 17:30～19:00

講師 今泉 靖徳

SIC CAFE vol.04

Rethinking Design
～建築から考えるデザイン・イノベーション～

7/11 (木) 15:40-17:00

SIC CAFE vol.8

八王子の第6次産業へようこそ
新しい農業のはじめかた

11月27日 水 17:30～19:00

SIC CAFE vol.01

地域交流会 竹カフェ

法大生による
キャンパスツアー
& 防災関連企画

日時 2024年9月21日 (土)
時間 13:00～16:00
場所 法政大学多摩キャンパス
定員 30名 (先着順)

私達が作ったお茶販売中!!

お茶の購入希望は下記、連絡先まで!!

メール: tamaborasanogawa2021@gmail.com
FAX 042-783-2167

学んだ後はソクメシ!
事前注文でからあげ弁当をすぐゲット!

580円

地域交流会 竹カフェ

法大生による
キャンパスツアー
& 防災関連企画

日時 2024年9月21日 (土)
時間 13:00～16:00
場所 法政大学多摩キャンパス
定員 30名 (先着順)

地域交流DAY 2024

2025.3.2 法政大学 多摩キャンパス
13:00-16:30

フードドライブ
2024年12月23日(月) 12:00~18:00 in 自由
ご家庭で余った食品、
寄付しませんか？

対象食品
賞味期限が
一か月以上のもの
・未開封のもの
・常温保存が可能なもの

SIC
HITプロジェクト

深淵
Fashion show
11/21(木) 開演19:00~
甲法政大学 多摩キャンパス
ペDESTリアンデッキ
来場者登録は
こちらから→

EAT LOCAL
FROM ETHICAL BY HOSOI INNOVATION CLUB
DATE October 22, 2024
MENU European Plate
PRICE 1000yen
PLACE egg comic second floor
TIME 11:00-14:00
To make a reservation, please use this QR code:
ATTENTION
Reservations are required for this menu.
IN TAMA CAMPUS

焼き芋屋さん
多摩キャンパスの
ホセイイノベーションクラブ
11.26 Tue
~ 27 Wed
12:00~15:00
場所: 総合棟食堂前
多摩キャンに焼き芋さんと八百屋さんがやってくる

11月24日開催
しろやまふれんず
秋のオレンジ
コンサート
・11月24日(日)
14:00~16:00
・城北センター
・参加費無料
13:30~受付開始
14:00~開演開始
14:40~Voice of Winds
(吹奏楽/アンサンブル)
15:00~お茶会
お問い合わせ
しろやまふれんず事務局
TEL:042-783-3005

HAND TO FOODLOSS AND HOMELESS
FOOD DRIVE
11/26(火) 27(水)
13:00~15:00
開催場所
多摩キャンパス 円芝
ご家庭で余っている食品はありませんか？
こども食堂に寄付します！
【対象商品】
・賞味期限が1ヶ月以上のもの
・未開封のもの
・常温保存が可能なもの

モルックで
あそぼう!!
日時: 12/7(土) 10~12時
受付 9:30~
当日の流れ
1. 受付
2. モルック遊び
3. 自由時間
4. 終了
お問い合わせ
TEL: 042-783-8117

クリスマス
12.23 12:00~16:00
クリスマス
12.23 12:00~16:00
クリスマス
12.23 12:00~16:00

Hosei innovation club
**100円
モーニング**
多摩キャンで朝ごはんを食べよう！
日時: 12.10 ▶ 12.13
時間: 10:00~11:00
場所: スロワールドカフェ
協力: スポーツブランディングラボ
・佐野川プロジェクト
・スロワールドカフェ

12/4~12/6
期間限定
佐野川茶ラテ
~限定20杯 hot & cold~
価格 200円
時間 11:00~12:00
場所 エググドーム 陸
写真はイメージです
※本物の12/10~12/13は、二ツツ開帳が
【エググドーム】 10:00~11:00
100円でお茶会がスタートの機会があります！
乳質のためお茶はご注意ください！

2024
若葉台クリスマス会
日程 2024年12月21日(土)
時間 1部:10:00~12:00 2部:13:00~15:00
(5人未満の場合は午後のみ)
場所 YYわかば
参加費 ひとり500円 ※原則保護者同伴
お申し込みはこちら
TEL:080-5007-5860(田中環)
MAIL:maryrose1945@yf7.so-net.ne.jp
締め切りは12月10日まで
子どもたちも笑顔にできる大人の方の参加
お待ちしております！！

募金で交換！輪島塗で能登を応援しよう！
Instagram
輪島塗 救出プロジェクト
12月16日 月
時間: 12:00~16:30
場所: 法政大学多摩キャンパス
(購買部/田舎組事務所4342)
円形芝生広場(雨天時総合棟下)
担当: 現代福祉学部2年 今西純矢
メール: hosi.wajimanun@gmail.com
※当日は現金で交換！

Team Circulation presents
Outdoor Cinema
あなたが
一番大切にしていることは？
17:00 open
2024.12.6 @円芝
By hosei innovation club

竹カフェ
ボッチャ大会
日時: 3/22(土)
時間: 13:00~15:30
場所: 法政大学多摩キャンパス
EGG DOME5Fホール
定員: 24名(先着順)
内容
命懸けとなっているバランビッ
ク競技のボッチャを皆さんと体験
します！
お申し込みは法政大学ソーシャル・イノベーションセンター
まで(詳細は表紙に記載)
住所: 〒194-0298
東京都町田市和原町4342 総合棟2階
電話: 042-783-3014
FAX: 042-783-2167
メール: sic@ml.hosei.ac.jp 申込期限: 3月14日(金)まで

太陽光発電で
ホットケーキづくり
by 法政大学の学生
日時: 10/27(日) 13:00~16:00
場所: めじろ台第一会館館
参加費
無料
内容: 太陽光発電で得た電力でホットケーキを焼き、食べよう！
(電動モーターの設置もありません！)
主催: 法政大学法政会
後援: めじろ台第一会館



法政大学ソーシャル・イノベーションセンター

〒194-0298 東京都町田市相原町 4342

法政大学多摩キャンパス 1 号館(総合棟)2 階

TEL:042-783-3014(平日 9:00~11:30、12:30~17:00)

Mail:sic@ml.hosei.ac.jp



法政大学 SIC の最新の情報を発信中！ 各種サイト・SNS を是非ご覧ください！

X (旧 Twitter)
@SICtama



Instagram
@sic_tama



YouTube



SIC WEB サイト



SIC 学生作成
WEB サイト

